

第1日 9月29日 (土)

シンポジウム I (14:30~17:30)

A会場 (C13 教室)

第一次世界大戦の諸相 — 個と全体の視点から  
Aspekte des Ersten Weltkrieges  
– aus der Perspektive des Individuums und der Gesellschaft

司会：山本 順子

2018年は第一次世界大戦終戦100年であることに鑑み、当大戦を現代の視点から再構成することで、第一次世界大戦が戦争の世紀としての20世紀に与えた影響の射程をさまざまな角度から討議する。具体的には、社会全体が戦争へ向かう中で個人が開戦を後押しした現実を明らかにするとともに、戦争の悲惨な現実が人々を襲い始めたときに社会制度が果たした個人への支援に言及する。個と社会それぞれの戦争体験を含めて第一次世界大戦を多面的に切り取っていくが、どの側面にもそれまでに見られなかった新しい事象の出現を指摘することができることを明らかにする。

第一次世界大戦は、大量殺戮兵器の投入に伴う悲惨な戦争形態の幕開けと言われている。少なくとも、国全体を総動員して激しい消耗戦を展開する20世紀の戦争のあり方は、第一次世界大戦が出発点となっている。本シンポジウムで着目するのは、戦争形態のみならず、個人と社会の新しいあり方も第一次世界大戦の中に見出すことができるということである。

この問題に着目する際、次の点から出発しなければならない。すなわち、第一次世界大戦の特殊性として、人々は「戦争はすぐに終わる」と信じていたことである。開戦当初は楽観視していた人々であるが、その期待とは裏腹に次第に20世紀型総力戦の雛形を作り上げて消耗戦へと至るとある種の矛盾を指摘することができる。この楽観から絶望へ移ろう過程で、精神文化や社会構造が新しい段階に突入していったのである。

本シンポジウムの構成は以下のとおりである。第一に、個と全体を包摂する視点から第一次世界大戦の不可避性に言及する。敵味方という構図が生じる背景について、同時代人の言動等の分析を通して検討する。第二に、個人と社会の関係性について戦争体験の視点から再構成する。第一次世界大戦に従軍した作家は少なくなく、また第一次世界大戦への従軍をモチーフとした文学作品も数多く出版されている。それらの中から二人の作家に焦点を当てて、第一次世界大戦が個と全体のあり方をどのように変化させたのか、どのような個を求め社会へと変貌していったのか、その過程は如何様であったかを描き出す。第三に、大戦当時の人々の生活を社会支援の視点から振り返る。戦争の長期化により被害が拡大し日常生活にも影響が現れ始める中、国家が国民生活を維持するため様々な方策を打ち出すこととなる。具体的な方策等を概観しながら、国民生活が戦争の長期化に耐えうる制度を確立していく過程を明らかにする。最後に、第一次世界大戦とそれに続くハイパーインフレーションを経験した大衆

がヒトラーを擁立するに至る心理を考察する。

これらを通して、20世紀型戦争に向かわせるための有形無形の新しい「装置」がすでに第一次世界大戦中に現れていることを指摘する。

## 1. ジンメル演説からみるドイツアイデンティティとフランス —『ドイツの内的変化』を中心に

齊藤 公輔

本発表では、ゲオルク・ジンメルが第一次世界大戦開戦直後に行った演説の分析を中心に、この戦争によって新しいドイツが誕生するという言説にはフランスが不可欠であったことを社会システム理論などを用いて多面的に検討する。

ジンメルは1914年11月の『ドイツの内的変化』という講演の中で大戦およびドイツの行く末を悲観的に予見しながら、第一次世界大戦の意義として次の3点を強調している。第一に戦争を通して既存のドイツとは「別個の」ドイツが誕生すること、第二に「1870年の完成」が事実上達成され得ること、第三に個人と全体が融合した「新しい型の人間」が目標となることである。その際、フランスとの区別を声高に叫んでいる。

この「フランスとの区別」をドイツ的でないものの排除と捉えることもできるが、ドイツの基盤づくりのためにドイツ的でないものを逆説的に必要としていると言い換えることもできるであろう。むしろそのように捉えることで、新生ドイツ誕生のメカニズムを明快に説明することが可能となるのではないだろうか。本発表ではこれに焦点を当て、自他の区別を自身の中にコピーすることでシステムが作動するという、社会システム理論に倣って分析を試みる。したがってこの報告は、第一次世界大戦におけるドイツとフランスの関係性を現代の視点から再構成するものである。

## 2. 破局・愛・救済 — マイリンクは黙示録に何を見たか

松浦 翔子

作家グスタフ・マイリンク（1868-1932）は戦争を黙示録と重ね合わせることで、変化に直面した社会の期待と不安を独自の視点から切り取ってみせる。本発表ではマイリンクの戦争観を考察する手がかりとして短編小説『サラエヴォの攻略』（1908）、『こおろぎ遊び』（1916）、長編小説『緑の顔』（1916）を分析する。とりわけマイリンクは、「1914年の戦争を説明する」ために『緑の顔』を書いた。この作品は第一次世界大戦を黙示録で預言されている終末の前触れとみなし、その先に自我の救済というシナリオを置いている。

こうした終末論的な戦争観は、世界が全体戦争へと向かう気運のなかで徐々に形作られていった。大戦前に書かれた『サラエヴォの攻略』にはすでに戦争に対するマイリンクの危惧の念が現れている。『緑の顔』と前後して執筆された『こおろぎ遊び』には、互いに憎み合い姿形も分からなくなるほどに殺し合う白いこおろぎたちの姿が描かれている。それはとりもなおさず大戦下の兵士た

ちの姿である。こうした『サラエヴォの攻略』や『こおろぎ遊び』に現れた戦争への不信感を見逃すことはできない。なぜならこの不信感こそが自我の救済という思想へと向かう原動力となっているからである。『緑の顔』においてマイリンクが描き出した救済は、全体性を志向する社会へのある種の抵抗とみなされるべきだろう。

### 3. ムーヅルと第一次世界大戦 — 編集者、作家、軍人としての視点から

前田 織絵

ローベルト・ムーヅル(1880-1942)は、1914年から1918年まで、第一次世界大戦に従軍し、この従軍が作品に与えた影響は少なくない。特に、「グリージア」Grigia(1921)と「ポルトガルの女」Die Portugiesin(1923)などにおいては、イタリア戦線における体験がモチーフとして挙げられる。「グリージア」における「採掘事業」は、「第一次世界大戦」であり、「採掘の失敗と死＝敗戦」を予感させる。また、カール・コリーノ(1942-)の「伝記」においても、大戦の影響の大きかったことについて言及されている。

作家でもあり編集者でもあるムーヅルは、戦争直前及び開戦時において、周囲の作家や編集者とは異なる態度を示しながらも、結局は自身の意志で戦争へと突入していき、実際に「軍人」として戦争を体験する。

本発表では、ムーヅルの第一次世界大戦以前と戦後の作品及び日記から第一次大戦の影響について考察を行うとともに、ムーヅル自身の第一次世界大戦での従軍時の体験と、従軍時の『兵隊新聞』(～1917年)の編集者として及び戦前のノイエ・ルントシャウの「編集者ムーヅル」について、開戦前～戦争に至る社会全般と自らの周囲の人間に対しての客観的な視点と、ムーヅル自身の内面の変化に焦点をあて、「軍人ムーヅル」と「作家ムーヅル」、そして「編集者ムーヅル」についての考察を行い、大戦のもたらした意味について考察を行う。

### 4. 第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護 — 寡婦への支援を中心に

北村 陽子

本発表は、多くの犠牲者を生じた第一次世界大戦期およびその後の時期のドイツにおける戦争犠牲者支援、なかでも寡婦への支援を明らかにするものである。

第一次世界大戦中の公的な遺族支援は、兵士の最終的な軍隊内位階に応じた年金を、寡婦・遺児・両親に対して支給することに限定されていた。しかしこれだけでは現実の遺族の助けにはならないとして、自治体や民間慈善組織が協働した戦時扶助の一環で、兵士遺家族の女性たちの就労支援が行なわれた。いくつかの自治体で、寡婦向けに職業教育コースを設置したり、自治体労働局を中心にして就労を斡旋するサービスが提供された。

1920年に制定された国家援護法は、戦争犠牲者への公的支援を定めたものであるが、ここには第一次世界大戦中の経験が反映されている。つまり戦前から

あった年金の支給に加えて、戦時中に必要に応じて実践された就労支援も盛り込まれたのである。年金に関しては、軍隊内の位階に応じた査定ではなく、戦没兵士が就労不能度 100%と認定された場合の金額を基準として算定された。また就労支援は、戦時中は自治体ごとに差のあった職業教育と就労斡旋を、すべての自治体で実施することが明記された。戦没兵士遺族への支援は、戦時下の大量死を経験したことで、国家が均質なサービスを保障する、あらたな制度へと変化した。

## 5. インフレーションと無力 — ヒトラー擁立へと向かう大衆の心理

樋口 恵

第一次世界大戦後に請求された多額の賠償金、その賠償金の不払いに対する制裁としてのルール占領、それに伴う失業者の急増と物不足、そしてライヒスバンクによる紙幣の大量発行。様々な要素が重なり、1923年、ドイツは史上類を見ないハイパーインフレーションに見舞われた。インフレーションやその後の世界恐慌に続く失業率の増加は、しばしばナチス台頭の要因とみなされてきた。完全雇用を謳うナチ党が、経済的困窮を背景に人々の支持を集めたという解釈である。

エリアス・カネッティはこうした解釈に新しい視点を与えている。カネッティは『群衆と権力』*Masse und Macht* (1960) において、インフレーションの被害者たちがマルクの価値下落を自分自身の価値下落のように感じた、としている。人々は価値を低下させられ、無価値化されたことを忘れず、同じことを別の対象に経験させようとする。ヒトラーはその対象としてユダヤ人を選んだ、というのである。カネッティは経済的困窮をナチス台頭の直接の原因とするのではなく、その背景に、インフレーションの最中に人々が抱いた無力感を見ている。

本発表では『群衆と権力』の他、ヴァルター・ベンヤミン『一方通行路』*Einbahnstraße* (1928) やエーリッヒ・フロム『自由からの逃走』*Escape from Freedom* (1941) などにおけるインフレーションに関する考察を手がかりに、ヒトラー擁立へと向かう人々の心情を再考する。

シンポジウム II (14:30~17:30)  
B会場 (C15 教室)

ドイツ・ミステリを読む・観る  
— インターカルチュラルリティとインターメディアリティの観点から  
**Interkulturalität und Intermedialität im deutschen Krimi**

司会 : Oliver Mayer ・ 長澤 崇雄

Krimis sind heutzutage fester Bestandteil der Alltagskultur, sowohl in ihrer traditionellen Form als Kriminalroman oder Kriminalgeschichte wie in der moderneren Form als Fernsehkrimi. In der Literaturwissenschaft wird dem Krimi in den letzten Jahrzehnten vermehrt Aufmerksamkeit zuteil, was auch an der gestiegenen literarischen Qualität vieler Kriminalromane und einer teilweisen Auflösung des Gegensatzes zwischen ernsthafter Literatur und Unterhaltungsliteratur liegt.

Grundsätzlich folgen alle Krimis dem gleichen Schema: Ein Verbrechen (Mord) passiert – der Detektiv ermittelt – der Verbrecher (Mörder) wird gefasst. Dabei zeigt sich der Krimi jedoch offen gegenüber literarischen und gesellschaftlichen Einflüssen, so dass das Grundschema vielfältig variiert wird.

In diesem Symposium befassen sich die Referenten sowohl mit dem Kriminalroman (Vorträge 1 und 2) wie mit dem Fernsehkrimi (Vorträge 3 und 4). Im ersten Vortrag werden die Kayankaya-Romane von Jakob Arjouni behandelt, die bei ihrem Erscheinen in den 1980er und 1990er Jahren auf erhebliche Resonanz gestoßen sind, da sie Hardboiled-Elemente aus amerikanischen Krimis mit interkulturellen Elementen kombinieren. Inzwischen gehören die Kayankaya-Romane zu den am intensivsten analysierten Kriminalromanen in der Literaturkritik und der Germanistik. Im zweiten Vortrag geht es um Romane, die seit 2015 erschienen sind, und in denen der Detektiv nicht in seinem Heimatland, sondern im Ausland ermittelt: ein japanischer Detektiv in Deutschland und ein deutscher Detektiv in Japan. Der Vortrag analysiert, wie die Ermittlungsarbeit der Detektive in der fremden Kultur literarisch dargestellt wird und welche interkulturellen Aspekte erwähnt werden.

Der dritte Vortrag schließt sich an dieses interkulturelle Thema Japan/Deutschland an und analysiert zwei Folgen des „Tatort“, die kürzlich gesendet wurden und zahlreiche intertextuelle Bezüge aufweisen. Der Tatort wird seit 1970 ausgestrahlt und ist die wohl bekannteste und beliebteste Fernsehkrimi-Reihe in Deutschland. Während die Tatort-Folgen normalerweise für das Fernsehen geschrieben werden und keine literarische Vorlage haben, gibt es andere Fernsehkrimis, die auf einem Kriminalroman beruhen. Diese Fernsehkrimis machen das Konzept der Intermedialität im Krimi sehr deutlich. Sie werden im vierten Vortrag behandelt, der auf diese Weise die Brücke zwischen Kriminalroman und Fernsehkrimi schlägt.

## 1. 埋蔵される屍体 — ヤーコブ・アルユーニ「カヤンカヤ5部作」について

長澤 崇雄

本発表は、トルコ系ドイツ人の私立探偵カヤンカヤを主人公とする、アルユーニのハードボイルド・ミステリ 5 部作を対象に、その文学的意義を語る試みである。ミステリが単なる謎解きの物語というジャンルの枠を越えて、一定の文学性を主張しうる存在になろうとするにあたり、例えば「社会批判」はひとつの重要な契機であった。だが、アルユーニに先行する世代の作品が実証するように、ミステリにおけるこの要素は往々にしてエンターテインメント性との両立が難しい。彼が社会批判を作品に盛り込む上で、主人公を「私立探偵」であり、その上「トルコ系」と設定したことは、偏見や差別との頻繁な遭遇を通じ、社会批判の発動を容易にするという点で有効であり巧妙であった。なるほど、先行する論が概ねこの点に立脚し、作品の社会批判的側面を強調するのも至極当然である。しかしながら、文体の分析などを通じ作品のエンターテインメント性を評価することは、必ずしも充分に行なわれてこなかったと言わざるをえない。本発表では、アルユーニの文体と、それが現実描写の上で発揮する効果とが、社会批判性と不即不離の関係を保持しつつ、これらの作品を娯楽性溢れる、読むに値するものとしている経緯を検証したい。

## 2. Ermittlungen im Ausland – Inspektor Takeda in Hamburg und Kommissar Ahlweg in Tokyo

Oliver Mayer

Die Region spielt in deutschen Kriminalromanen oft eine wichtige Rolle, besonders bei den weit verbreiteten Regiokrimis, bei denen das Gebiet der Handlung – meistens die Heimat des Detektivs – ebenso genau beschrieben wird wie die Suche nach dem Mörder. Dieser Vortrag befasst sich mit Kriminalromanen, in denen der Detektiv jedoch nicht in seinem Heimatland, sondern im Ausland ermittelt.

Grundlage sind die drei Romane „Inspektor Takeda und die Toten von Altona“ (2016), „Inspektor Takeda und der leise Tod“ (2017) und „Inspektor Takeda und der lächelnde Mörder“ (2018) von Henrik Siebold, in denen Inspektor Kenjiro Takeda, der von der Mordkommission in Tokyo nach Hamburg versetzt wird, gemeinsam mit einer deutschen Kollegin mehrere Mordfälle löst; sowie der Roman „Sayonara, Bulle“ (2015) von Carsten Germis, in dem Kommissar Bernie Ahlweg von Peine nach Tokyo geschickt wird und der dortigen Polizei hilft, einen Mordfall zu erkennen und den Täter zu ermitteln.

Bei diesen Krimis wird vor allem analysiert, vor welchen Problemen der Detektiv steht und wie die Autoren dem Detektiv die Lösung seiner Fälle ermöglichen, ob die dargestellten Figuren und Orte realistisch sind, welche Stereotypen verwendet werden und wie die Figuren miteinander kommunizieren

### 3. Intertextuelle Spurensuche im Tatort: Zwei Folgen aus München zwischen Japan, Hollywood und einem realen Mordfall

Stefan Buchenberger

In der seit 1970 ausgestrahlten, populärsten und langlebigsten deutschen TV-Krimiserie „Tatort“ werden, wie auch in anderen vermeintlich trivialen Medien, immer wieder kontroverse und gesellschaftlich relevante Themen aufgegriffen und einer breiteren Öffentlichkeit zugänglich gemacht. Ebenso wird der regionale Kontext der jeweiligen Tatorte durch zahlreiche intertextuelle Bezüge erweitert. Durch die Analyse zweier Folgen des Münchner Tatorts soll dies verdeutlicht werden.

Die beiden Münchner Folgen „Die Wahrheit“ (Oktober 2016) und deren Fortsetzung „Der Tod ist unser ganzes Leben“ (April 2017) zeichnen sich durch eine gelungene Mischung verschiedener intertextueller und interkultureller Bezüge aus. In „Die Wahrheit“ geraten die Ermittler an ihre Grenzen, da es keine objektive Wahrheit zu geben scheint. Der Mord an einem Unbeteiligten, der mit einer Japanerin verheiratet ist, führt in ein Gewirr unterschiedlicher Aussagen, eine Erzählweise, die deutliche intertextuelle Bezüge zu Akutagawa Ryunosukes „Rashomon“ aufweist. Es finden sich aber, v.a. in der Fortsetzung, auch Referenzen zu einem realen Münchner Mordfall als auch Anklänge an hollywoodartige Serienmörderfilme.

In diesem Referat soll versucht werden, diese beiden Tatort-Folgen im Hinblick auf ihre intertextuelle Struktur zu entschlüsseln und zu zeigen, wie ein scheinbar regional verwurzelter TV-Krimi durch intermediale und intertextuelle Bezüge eine völlig neue Dimension gewinnt.

### 4. ドイツにおける推理小説のテレビドラマ化 — 最近の作品を中心としたアダプテーションの事例研究

横山 香

ドイツのテレビ推理ドラマ (Fernsehkrimi) には Tatort (ARD) のようなオリジナル脚本から制作されるものと、小説を原作・原案とするものがある。推理小説のテレビドラマ化はドイツのテレビ創成期から存在し、それほど珍しいものではない。しかし近年、ベストセラーとなるドイツ語の推理小説が増加するにつれ、そのテレビドラマ化も増えている。それには視聴者数の保証という経済的利点があるのは確かだが、原作の作家やファンからの厳しい批評というリスクも存在する。にもかかわらず推理小説のテレビドラマ化が絶えないのは、テレビというポピュラーメディアによって生み出される、活字メディアとはまた異なる魅力や解釈——リンダ・ハッチオンのことばで言えば「複写ではない反復」「相似のなかの相違」——を制作者も視聴者も (場合によっては作家も) 期待しているからではないか。

本発表では Doris Gercke 原案の Bella Block シリーズ (ZDF, 1994-2018)、Nele Neuhaus の Taunuskrimi シリーズ (ZDF, 2013-)、Charlotte Link *Das andere Kind* (ARD, 2013)、Ferdinand von Schirach *Verbrechen* (ZDF, 2013) および *Schuld* (ZDF, 2015) といった近年のドイツ人作家によるベストセラー小説のテレビドラマ化作品を取り上げ、原作とテレビドラマとのそれぞれのテキスト間およびメディア

ア間の関係に注目し、また日本との文化間比較の視点も入れながら、アダプテーションの事例研究をおこなう。

口頭発表：文学 I (14:30～17:05)  
C 会場 (C23 教室)

司会：山口 庸子・糸井川 修

1. 衣服の交換、命の更新 — J・ビーダーマン『殉教者フィレモン』について  
橋本 由紀子

17世紀初頭(1610年頃)にイエズス会士ヤーコプ・ビーダーマンによって書かれた『殉教者フィレモン』は、303年の古代ローマ帝国支配下のエジプトの都市アンティノエで起きたキリスト教徒迫害を描く殉教劇である。都市一番の人気者で笛吹き兼役者である主人公フィレモンは、キリスト教弾圧から逃れようとするあるキリスト教徒と衣服を交換しただけで、突如敬虔なキリスト教徒となり、信仰を全うしながら殉教する。一方、フィレモンを処刑した総督アリアヌスは、処刑されたフィレモンの血が滴り落ちた土を矢で傷ついた右眼にかけると眼が治るという奇蹟を体験し、キリスト教へ改宗する。この殉教劇の前半の第3幕までは喜劇調だが、後半の第4幕、第5幕は深刻な場面が続く悲劇に一変している。

従来 of 先行研究では、この殉教劇の構成分析がなされたり、この劇がイエズス会学校における効果的な教育手段として使用されたり、ライバル関係にある修道士会への対抗手段や、同時代の浅薄な演劇論への反論として制作されるなどの分析はなされているが、劇内容の精査並びに解釈はあまりなされていないのが実情である。本発表では、本作品で目を引く衣服の交換と命の更新という2つのモチーフこそが、人間の肉体の不安定さを克服する上で相互に関連があり、この劇の根幹を成していること、並びに、こうした命の更新のモチーフが様々に変更されつつ、後のバロック悲哀劇に継承されているのではないかということを指摘したい。

2. ワーグナー博士とホムンクルス — 『ファウスト』第二部第二幕と第二次科学革命

相馬 尚之

本発表は、ゲーテの『ファウスト』第二部第二幕におけるワーグナー博士について、「第二次科学革命」との関連を踏まえつつ、検討することを目指す。

これまでも錬金術と並び、炭素の組成や尿素合成等に関する知見がホムンクルスの姿に影響したことが論じられ、ゲーテが当時の科学を取り入れつつ『ファウスト』を執筆したことが明らかにされてきた。他方でワーグナーはファウストに比して劣った俗物とされ、ゲーテの錬金術への傾倒あるいは近年の生命科学の先駆者との関連から参照されるにとどまった。加えて、科学理論の影響に比して、第二次科学革命における近代大学・専門教授職・学生実験室の整備

といった制度面の大転換は軽視されてきた。

そこで本発表は、草稿との比較を踏まえつつ、「大学教授」ワグナーの再評価を試みる。ワグナーはもともと、「化学の女小人」を造るため必要な物質を集めることを企図し、空のフラスコを持ってメフィストのマントに乗り、実験室を飛び出す予定であった。だが、この冒険的科学家は、実験室に取り残される哀れな学者に変えられてしまう。

もともと第二次科学革命により、ワグナーのような凡才を専門化した技師や研究者として大量に育成する制度が構築された。そして、ファウストのような天才ではなく、凡庸かつ均質的人間が科学及び産業社会の担い手として勝利する。ワグナーは、凡夫である故に、以後の社会の中核となる資格を得たのである。

### 3. 『感傷主義の勝利』に見るゲーテの庭園観 — エリジウムと冥府の統合とヴェルリッツ庭園

伊東 麻衣

ゲーテは感傷主義を否定したのだろうか。

ゲーテは 1775 年にワイマールに招かれ、1776 年にガルテンハウスを入手し、1778 年には英国式庭園として名高いヴェルリッツ庭園を訪問し感銘を受け、その体験をもとにワイマールのイルム庭園の造園作業を開始した。こうした背景の中 1777 年に書かれた戯曲『感傷主義の勝利』では造園が風刺的に語られる。劇中劇『プロゼルピナ』の直前に挿入されたモノローグでは、地獄の宮廷庭師が活気のない冥府に理想的な庭園を造ろうと美しいエリジウムの木々を移植すると、木々は夢のように消えてしまう。これは感傷庭園が繊細であり、裏を返せば活気のない風景へと化してしまう危険性を示唆している。

フォーゲルの『感傷庭園芸術小論』（1786 年）は、自然を手本とし、庭園は自然のみによって形成されたように見えねばならないと述べる。しかしゲーテの記述は人工性そのものを否定するというよりも、自然の中で人工性が活かされることの困難さを示唆していると取れる。

劇中劇の風刺的造園については、冥府とエリジウムを *Kunst* と *Natur* と見、両者の対立を止揚する試みが無駄であるといった見方がなされてきたが、本発表では両者の統一が困難ではあるものの一つの理想として捉える。冥府とエリジウムは単純に *Kunst* と *Natur* の対立には当てはめられず、エリジウムは理想の風景を求めた風景庭園の象徴である。翌年に訪問したヴェルリッツ庭園をゲーテは理想像としての「エリジウム」として捉え、そこに『感傷主義の勝利』での主張の体現を見たのである。

#### 4. ヴァンパイアと「目」のモチーフ — ホフマンの『不気味な訪問客』に見るマグネティスムス

森口 大地

ヴァンパイアは一般的に生者の血を吸う生ける死者であると考えられており、彼らが初めて登場した18世紀前半の報告書で既にそう記されている。蘇る死者という不可思議な現象を説明するために、当時から様々な理論が提唱された。そこで主として取りあげられるのは肉体、霊、魂に関する言説だが、その際に「共感 (Sympathie)」への言及が見られる。一方、18世紀後半にはマグネティスムス、あるいはメスメリスムスという理論が出現した。世界は動物磁気なるものに満たされ、全てが相互にそれを介して繋がっているというこの理論は、人間と自然の相互作用としての共感言説に通ずるものがある。メスメリスムスの大家であるフランツ・アントン・メスマーは完全に啓蒙的な意図を抱いていたが、当時の医学会によってこの理論は怪しげなイメージを付与され、文学では自律性の喪失、他者による操作というテーマと結びつく。催眠による治療は患者を回復させもするが、その裏には他者の精神を消耗させ、生命力を奪う可能性を秘めている。ヴァンパイアによる催眠や精神的吸血は、有名なところではポリドリの『ヴァンパイア』やストーカーの『ドラキュラ』で描かれているが、その際に印象的なのはヴァンパイアの眼力である。こうしてヴァンパイア、催眠、目というモチーフは互いに強く結びつく。E. T. A. ホフマンの『不気味な訪問客』では、その一端を垣間見ることができよう。

シンポジウム III (14:30~17:30)  
D 会場 (C25 教室)

感情：表現と操作  
**Gefühle: Von der Entstehung bis zur Manipulation**

司会：中村 靖子

現代の神経科学や認知科学の分野では脳機能研究の成果を受けて、感情の再定義が提唱されている。1994年、アントニオ・ダマシオは脳損傷研究に基づき、『デカルトの誤り』を發表し、情動は理性を妨げるどころか、情動を欠いてはそもそも社会規範は適切に習得されないと主張して、理性対感情という従来の二項対立的な捉え方に疑問を突きつけた。同年ジョセフ・ルドゥーは『エモショナル・ブレイン』において「感情／情動」を「神経系の生物学的機能」として捉えた。これらの動きは「感情革命」もしくは「情動論的転回」といわれている。一方、歴史学の領域では1930年代に「集団心性」という術語が提唱され、感情史研究の先鞭をつけた。文化や時代が違えば価値観も道徳観も違ったものとなる。どの時代にも固有の感情のあり方があるという考えのもと(Ute Frevert: *Vergängliche Gefühle*, 2013)、時代に応じた感情のモデルを再構成しようとするエモロジーの試みも定着しつつある(森田直子「感情史を考える」2016)。本シンポジウムはこうした問題提起を受け、それぞれの時代に固有の「感情のモデル」があるとすれば、文学はそれを描いてきたというテーゼのもと、過去の感情生成のモデルを浮かび上がらせることを目的とする。ルドゥーやダマシオの翌年に出版されたカール・アイブルの *Die Entstehung der Poesie* (1995) は、現代の生物学、社会学史、社会学の方法論を文学研究に応用する試みである。それによれば、18世紀啓蒙主義時代、人間の仮想的構想力は飛躍的な発達を遂げたという。こうしたアイブルのテーゼを承けて、解剖学に基づいた身体観により感情が起動するメカニズムの捉え方の流れを確認する(中村)。次に、18世紀末に書かれたゾフィー・フォン・ラ・ロッシュの旅行記をもとに、当時の感情規範について論じる(大林)。19世紀に入ると、産業革命により社会構造が大きく変わる。教養市民層の誕生と共に社交術や感情規範もまた変わっていく中で、名誉と悲しみに着目し、時代的な制約を受けた感情と、より普遍的に思われる感情について論じる(森田)。こうした変転のさなかには、望むと望まざるとに関わらず、自分が属する社会から乖離する個人が生じる。文学は、最も敏感に人間の感情形成の変化を描き出すことに成功したが、それをフォンターネの『セシル』(1886)を手がかりに明らかにする(Schlarb)。20世紀に映画が誕生すると、作品と感情との関係も新たな様相を帯びる。視覚的、聴覚的要素を駆使した映画は感情を煽るのにすぐれた手段であり、個人として営む読書行為とは違った効果を持つからである。20世紀という政治的プロパガンダの時代に、山岳映画(1926)と山岳小説(1937)で主題化される「死の恐怖」をもとに、消費される感情について論じる(中川)。

## 1. 感情起動のプログラム — 神経科学的方法論を参照して

中村 靖子

18 世紀半ばに解剖学者アルブレヒト・フォン・ハラールが数多くの生体解剖実験に基づいて、人間の神経系の構造を明らかにして以来、感情は、生理的反応に伴う現象に過ぎないのか、それとも人間性の発露なのかという問題が問われ続けてきた。ラ・メトリが「人体は自らゼンマイをまく機械である」と宣言したのは『人間機械論』(1748)においてである。デカルトが、人間身体は動物の身体と変わらないが、理性を持つ人間と違って動物に心はないとしたのに対し、ラ・メトリは、動物にも感情があり、人間は種をこえて「共感」を惹起されると主張した。理性に対置され理性により制御されるべきものと見なされてきた感情は、人間らしさの表現とされたのである。

ハラールが提示した、「易興奮性 Irritabilität」と「感受性 Sensibilität」という 2 系統のシステムとして人間身体の捉え方 (Haller: 1755) は、ロマン派医学を経て 19 世紀の近代神経科学へと継承された。感情概念は、こうした身体のメカニズムの解明と切り離すことができない。現代の神経科学に基づく感情研究を踏まえた文学研究の試みも既になされつつあるが、本発表は、文学は新しい人間像を提案してきたというアイブルの問題提起を承けて、感情のモデルを創造し提案するという、文学の果たしてきた役割を照射するのが、本発表の目的である。

## 2. 消えゆく感情の擁護者 — ゴッティフリート・フォン・ラ・ロッシュの『スイス旅行記』の文脈

大林 侑平

ゴッティフリート・フォン・ラ・ロッシュの『スイス旅行日記』(1787) は、1784 年のスイス旅行の際の娘に宛てた書簡という形式で著された。その中でラ・ロッシュは、スイスの自然の美しさとその地に住む民の様子を描写し、当地の名士やその家族との談話の様子を綴った。この旅行記は次の二点から、18 世紀後半のドイツ語圏の思想的・文学的潮流のなかで特徴的な作品であるといえる。

まず、感情の統御を市民道徳と結びつける啓蒙的な運動や、感覚感情の哲学と連動していた感傷主義の影響が色濃い点である。ラ・ロッシュは 1771 年に書簡体小説『シュテルンハイム嬢の物語』を著し感傷主義の代表的作家となるが、この旅行記においても内容的形式的に感傷主義の特徴が現われている。

もう一つが旅行記の流行のなかで形成されてきたスイス像を基本的には踏襲している点である。既にアルブレヒト・フォン・ハラールの詩『アルプス』(1729) やザーロモン・ゲスナーの詩集『牧歌』(1756) などの文学作品や、数多くの旅行記によって一種のアルカディアとしてスイスは表象されるようになっていた。

しかしながら感傷主義は 1780 年代には既に衰退し、スイス神話がスイス社会の実態との乖離を批判されることもあった。したがって本発表ではこの旅行記を、過去の才人を民や土地とともに讃えたモニュメンタルな書簡体小説として読解し、感情規範の変化に抗うラ・ロッシュの姿を浮き彫りにすることを試み

る。

### 3. 感情の自己統御 — 教養市民たちの試み

森田 直子

近代ヨーロッパの文化的特徴の一つとして、感情の自己抑制、自己制御が挙げられる。とくに社会の上層を成す男性にとって、己の感情を統御できることが、他者（自己制御が全くあるいは不完全にしかできない下層民や女性）に対する支配を正当化する根拠にもなっていた。その際、感情の自己制御とは、全ての感情を押し殺したり、押さえ込んだりすることではなく、一方において自己の感情を抑制し、他方において時宜に適った感情を表現し、また受け入れるという、双方間のバランスをとることを意味した。

本発表では、こうした既存のテーゼに向き合いながら、19世紀ドイツの教養市民の男性に注目し、彼らがおこなった決闘（スポーツの一種とみなされがちな学生の「決闘試合 Mensur」も含む）を題材として取り上げ、検討を加える。決闘という行為と結びつく、近代ドイツの上層階層の男性にとって「特有の」感情であったとされる名誉と、決闘による近しい人との別れに伴う「普遍的な」感情としての悲しみや苦しさという二つの異なる感情に対して、教養市民の男性たちはどう向き合ったのだろうか。また、彼らはそうした感情をどのように自己統御し（ようと試み）、いかに表現すべきと捉えていたのだろうか。これらの問いを、彼らが残した回想録、書翰、あるいは礼儀作法書、事典などを用いて感情史的に把握することを試みる。

### 4. Wertewandel und Gefühlskonflikt. Zum Verhältnis von soziokultureller Prägung und Selbstachtung in Fontanes „Cécile“

Hans-Michael Schlarb

Fontane hat in seinen Gesellschaftsromanen den sich in seiner Zeit vollziehenden Wertewandel in vielerlei Gestalt sichtbar werden lassen. In „Cécile“ (1886), einer wichtigen Vorstufe zu „Effi Briest“ (1894/95), versetzt er seine Figuren in eine von ihrem Herkunftsmilieu abweichende soziokulturelle Umgebung, so dass sie deren Normsetzungen mit einem geschärften Bewusstsein gegenüber stehen. Während sich in den konventionellen Versuchen der männlichen Figuren, ihre Wert- und Gefühlskonflikte zu lösen, die ungebrochene und nicht zuletzt gefühlsvermittelte Macht solcher Normen offenbart, erweist sich im scheiternden Kampf der Titelheldin um die Wiedergewinnung ihrer Selbstachtung die Überholtheit dieser Normen. In seinem Appell, die Beschränktheit des Bewusstseinshorizonts der Figuren zu überschreiten und die Brüchigkeit bürgerlicher Wertauffassungen zu erkennen, entfaltet der Roman sein gesellschaftskritisches und -veränderndes Potential.

Der Vortrag unternimmt den Versuch, die Auswirkungen des sich im Hintergrund der Erzählhandlung vollziehenden kulturellen Wandels auf die Hauptfiguren und ihre jeweilige Gefühlsökonomie herauszuarbeiten und dabei den zentralen Wert, den sie ihrer (Selbst-)Achtung zumessen, zu bestimmen. Unter Rückgriff auf die Anerkennungstheorie A. Honneths wird damit ein Element herausgearbeitet, das die

Kritik an ökonomistischen Menschenbildern mindestens veranschaulichen wenn nicht gar untermauern kann und das es zugleich erlaubt, kulturellrelativistische Positionen aufzuweichen. Dabei wird auch deutlich, welchen eigenen Erkenntnisbeitrag die historisch orientierte Emotionsforschung zu leisten vermag.

## 5. 山岳映画・山岳小説に見る恐怖感情と自己認識

中川 拓哉

山岳映画とは、過酷な高山世界に挑戦する登山者のドラマを描いた映画であり、第一次世界大戦後に活躍したドイツ人映画監督アーノルト・ファンクにより映画ジャンルのひとつとして成立した。高山世界を舞台とする作品は戦間期の文学作品にも見られる。そのうちの一つにマックス・フリッシュの『静寂からの返答』 *Antwort aus der Stille* (1937) がある。

これまで山岳映画に対しては、ナチとのイデオロギー的関連を指摘する古典的研究のほか、男性神話、ロマン主義美学の継承、ヴァイマル共和国期の先進的な映画技術の継承などの分析が成されてきた。これらの成果に死の恐怖という感情の観点を加えることが本発表の主眼である。

山岳映画や山岳小説において山地は、ただ観賞の場として扱われるばかりではなく、死の恐怖を戦略的に用いた感情表明のロケーションとして機能する。この設えられた空間において演出される死の恐怖は、「自己」の破滅を予感させるという形で「自己」を強力に担保する。「本当の自分」を求めて社会から脱出し、自ら死に臨むかのような登山者たちは、いかに死を消費するのか。本発表は『静寂からの返答』およびファンクの映画作品を対象に、登山に伴う自然情景への感応、死の恐怖といった情動体験が映画・文学作品において処理される次第を検討する。

口頭発表：文学Ⅱ（14:30～17:05）  
E 会場（C33 教室）

司会：藤井 たぎる・林田 雄二

1. シュテファン・ツヴァイクの小説技法と精神分析

籠 碧

ツヴァイクは特に 1920 年代以降の心理小説において、「私」が、初対面の他人の長話を聴くという枠物語の形式を何度もとった。話の内容は大抵、自分が「情熱」にさらわれ市民社会の規範を破った事態についての心理的告白だ。多くの作品は、「私」と外枠を削ったとしても成立しそうに見えるため、先行研究はしばしば枠構造を 19 世紀的遺物として片付ける (Stratmann)。これに対して発表者は、そのように評価されるほど余計なはずの枠構造の導入が、ツヴァイクが明言する自身の文学技法、つまり「筋書きに不要な要素を徹底的に削ぐ」ことと衝突していることに注目する。ツヴァイクはあくまで枠内の語り手に「告白させる」ことに意義を見出していた可能性がある。今回はそれを、脳器質論が行き詰まった時代に患者に喋らせることで治療を行い精神医学に革新をもたらしたフロイトとの関係に求める。同郷のツヴァイクとフロイトは親しい仲だった。二人の関係について、意識と無意識の葛藤として心的生活を捉えるという考え方の類似はよく指摘されるが (Kory)、枠構造との関わりに焦点を絞り考察した研究は見当たらない。本発表ではツヴァイクによるフロイトの評伝『精神による治療』と往復書簡を精読して両者の類似点と相違点を踏まえた上で、作品『アモク』『女の 24 時間』『心の焦燥』『チェスの話』を検討する。最終的に、当時の精神医学の動向に即してツヴァイクの枠構造が持ちえたアクチュアリティについて考えたい。

2. 構成的イロニー再考 — 新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題とカカーニエン構想について

桂 元嗣

2016 年より出版が開始された W・ファンタ編集による 12 巻本のムージル全集に収録された『特性のない男』は、構想の「公開の度合い」と作者の「最終的な意図」に基づいて未完部分の草稿が編集されている。これは数々の批判を受けて 1978 年に出版された A・フリゼー版『特性のない男』の編集方針を受け継いだものであり、各年代のテキスト生成過程がより明確になったが、結果的に第二巻の継続部分に関する数々の構想から 1937 年から 38 年にいったんゲラ刷りに回された草稿を優先させ、絶筆「夏の日の息吹」に至る兄と妹との感情や愛についての考察こそが作者の最終的に意図するところであり、ロマーンの結末であるとする解釈へと読者をいざなうことになる。しかし本発表ではむしろゲラ刷り原稿を、あるいは 1932 年における『特性のない男』第二巻の部分刊

行すらも自らのイデーを自由に展開するうえでの「足枷」(Fessel) と感じながら、構築されたひとつの思考世界を従来とはまったく異なる仮定で新たに検討し直しては放置を繰り返すムージルの方法自体に着目する。その際、従来のムージル研究で注目されていたテキスト構成原理としてのイロニーに再び光を当てつつ、1933年に執筆された「カカーニエンのとある都市についての描写」という断片を取り上げ、ゲラ刷り原稿の該当箇所とは対照的な内実をもちながらも、ヨーロッパ的秩序が破局を迎えるその背景を分析しようとするムージルのイデーを明確に映し出す鏡のような役割を果たしていることを示す。

### 3. 測量士 K. のパースペクティブ再考 — フランツ・カフカの「遠近法」について

庄司 知記

近年のカフカ研究では、その散文を映画や写真といったメディアと比較検討することが行われてきた。しかしそれが映画と結び付けられる際、従来論じられていたカフカ研究や文学研究における「視点」の問題は十分に考慮されていなかった。また、『城』が初め一人称で書かれ、三人称に書き改められたという問題も見逃ごされていた。これまで『城』は三人称でありながら主人公である測量士 K. の「視点」から物語られるとされていたのである。異邦人である K. が本当に測量士なのか、「城」から招聘されたのか明らかではなく、他の人物の発言や K. が目の当たりにした事実から真実を類推しなければならない。

物語『城』の分析を通して、小説における「視点」はどのような「立脚点」であるべきか、またそのような問いの可能性を考察していく。言語、国籍、人種、性別、社会階級、宗教や時代などを超えて読まれる散文とは何かが問題である。本発表が提示するのは「相対化 (Relativierung)」という概念である。物語『城』の叙述方法や人称の変換された意味と意義を、内容の上からも明らかにしていく。カフカと映画との関係で指摘されたドッペルゲンガーのモチーフに注目しそれを応用することで、人称の変換は主人公の思考と行為の相対化をもたらしただけではなく、物語の世界におけるある種の「権力」を相対化させたという解釈を提案する。カフカ研究で議論されているパースペクティブ論と、そのメディア論や権力論との接続を図る。

### 4. 「兵士的」倫理の解剖 — エルンスト・ユンガー『鋼鉄の嵐の中で』における男性同盟的気質について

稲葉 瑛志

本発表は、エルンスト・ユンガー (1895-1998) の戦争文学『鋼鉄の嵐の中で』における男性同盟的気質を支える「兵士的」倫理を、政治色のない第 1・2 版 (1920/22) から革命的ナショナリズム期の第 3 版 (1924) にかけて加筆修正された箇所に着目しながら論じる。

「兵士的」倫理は、例えばシラーの『ヴァレンシュタイン』において礼賛さ

れていたように、ドイツの政治的言説において市民的倫理の裏面として教養市民の文化の中に受け継がれてきた。市民的価値観の理想がその統合力を喪失したと判断されるとき、「兵士的」価値観を理想とする男性同盟が現実の *Gesellschaft* に代わる *Nation* の原型として現れるのである。

このテキストにおける「兵士的」倫理は、「騎士的なもの」「傭兵的なもの」「プロイセン的なもの」という三つの反近代的イメージに分けることができよう。本発表は、この倫理が第一次世界大戦後にいかなる政治的負荷を負いながら表明されているのかを各イメージの歴史的展開も視野にいれながら説明した上で、その相互作用を分析する。そこから、この反近代的倫理が、近代物量戦を経験した「保守革命 (*konservative Revolution*)」の作者の意識にいかなる矛盾をはらみながら受容されているのかを明らかにしたい。さらにこの「兵士的」倫理を分析することを通して、ユンガーを中心とする 1920 年代の「保守革命」の言説において表明された「ドイツ的自由」のイメージの源泉についても議論したい。

口頭発表：語学（14:30～17:45）  
F 会場（C35 教室）

司会：納谷 昌宏・人見 明宏

1. テキストから見える地域的特性 — 『ハイジ』におけるスイス語法を例に

大喜 祐太

本研究の目的は、ヨハンナ・シュピーリ (Johanna Spyri, 1827-1921) の作品『ハイジ』におけるスイスドイツ語的ないしスイス式標準ドイツ語的特徴を明らかにすることである。ある言語圏の小説を読んだ際にそのテキストから地域性が感じられるのは、たとえば、食べ物や自然などの文化や習俗に関する内容からである。しかし、その小説内のことばの使い方もテキストの地域性を特定できる要因の一つである。『ハイジ』について見てみると、この 19 世紀後半の文学作品は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』から影響を受けているとしばしば言及される通り、標準ドイツ語的特徴を色濃く備えている。Skirne (1994) などの先行研究によると、シュピーリは、作品の中でスイスの特徴を持つ言語使用を避けており、実際にテキストを分析してみても、いくつかの点ではそうした事実を裏付けることができる。しかしながら、標準ドイツ語で書かれた『ハイジ』の中には、少なからずスイスドイツ語的ないしスイス式標準ドイツ語的要素を確認できる。本研究では、質的・量的両面からの分析を通じて、テキストの持つスイス式標準ドイツ語の特徴を明らかにする。その際、テキストの中から単にスイスに特有の語彙を列挙するだけでなく、特徴的な語の組み合わせ・語の用法を特定することに主眼を置いている。

2. 空間的解釈から派生される時間的解釈 — *durch* を伴う移動の不変化詞動詞を例に

高橋 美穂

Wunderlich (1983) などで指摘されるように、*durch* を伴う移動の不変化詞動詞では、「～を通り過ぎる」という空間的な意味と「～（移動）し続ける」という時間的な意味という異なる意味解釈が認められる。本発表では、*durchfahren* や *durchfliegen* などの不変化詞動詞を対象に、これらの動詞における意味の分化のメカニズムを探る。大規模コーパス DeReKo を活用した事例調査に基づき、2つの異なる意味解釈が文中に共起する経路項（通過点ないし着点）と密接に関わること、表される移動事象のアスペクトがそれぞれ異なることを示す。さらに、空間的な意味と時間的な意味との間のアスペクトの違いに着目し、両者を事象構造 (Ereignisstruktur) の枠組みで分析する。*durch* を伴う不変化詞動詞の時間的な意味を事象構造の枠組みで示すことで、空間的解釈から時間的解釈への派生を可能にする仕組み—ある地点を「通過」するという位置の変化と時間の経過

とが 1 対 1 で対応していくという関係一を明らかにし、なぜそのような空間と時間との対応関係が成立するのかを論じる。時間に関わる概念や表現の基底には空間の概念・表現体系があると捉えられることがあり (Traugott 1978, Wunderlich 1985 など)、本発表はその派生のある種の原理を解明するケーススタディーとして位置づけられる。

### 3. ドイツ語から見た西ゲルマン語形容詞の語形変化 — 階層表示、平行表示、シンタグマ表示

清水 誠

本発表では文法化、脱文法化、外適応 (engl. exaptation) の観点から次の 3 点を中心に、ドイツ語を含む西ゲルマン語の形容詞語形変化を論じる。

- ①ゲルマン語形容詞弱変化の文法化は、名詞句に定 (definit) の形態表示を求めた歴史的発達の一環である。
- ②定の意味を失った形容詞弱変化は名詞句の性数格の表示手段に移行したが、ドイツ語の階層表示 (ルクセンブルク語記述の用語 fr. *marquage hiérarchisé*, dt. *einer guten Frau*) は同一語尾による余剰性を省く言語経済性の原理から説明されることが多い。しかし、平行表示 (fr. *marquage parallèle*, lux. *enger gudder Fra*) が支配的な言語も 1 種類の語尾ですむ点で同原理にかなっている。平行表示は北ゲルマン語を始め、中期オランダ語、ルクセンブルク語、イディッシュ語等にも見られる。ドイツ語の階層表示はけっして典型的なパターンではない。
- ③限定用法の形容詞語尾を失った英語はゲルマン語唯一の例外であり、英語以上に形態的簡素化を被ったアフリカーンス語も語尾 *-e* を広範に発達させている。その理由は Lass (1990) *How to do Things with Junk (JL)* が主張する語幹の異形態保持 (afr. *reg~regte*, dt. *recht*) への外適用よりも、名詞句のまとまりを明示するシンタグマ表示に求められる。

### 4. ドイツ語付加疑問の考察 — 対話相手の発話に対する反応を中心に

木村 英莉子

本発表の目的は、対話相手の発話に対する反応に際して使用される付加疑問の相互行為的機能について明らかにすることである。ここでいう付加疑問とは、*oder* や *ne* など、叙述文などの末尾に付与され、反応要求や確認の意味を添える独立節または独立した語である (e.g. *Du bist Student, oder?*)。これら *oder* や *ne* の付与された発話を付加疑問の機能を有するとみなす。英語付加疑問については従来、機能や使用頻度について多くの研究がなされてきたが、ドイツ語付加疑問についてはまだ明らかになっていない点が多く、またその相互行為上の機能については論じられていない。

付加疑問には、例えば、対話相手が「屋外プールよりも、自然の海で、砂浜で寝ころび、日焼けする方が素敵だ」と語った後に話し手が *das is halt wie im*

*Urlaub, ne?*と発話するように、聞き手の発話内容についてコメントを行うのに際して用いられる場合がある。これらの付加疑問の使用場面と相互行為上での働きについて明らかにする。

考察手法として会話分析を使用し、発表者がドイツ南部地方の都市で収録した二者会話データを分析した。この分析により、反応を示す際に使用される付加疑問は、対話相手への理解提示に際して使用され、コミュニケーションを円滑化し、共同性表明を行うという相互行為的機能を持つと論じた。

## 5. 中高ドイツ語における有接尾辞形容詞からの動詞形成

黒田 享

現代ドイツ語同様 (*kühl* > *kühlen*, *sicher* > *sichern* など)、中高ドイツ語では形容詞から動詞を形成できる (*tôt ,tot* > *tæten ,töten*、*heil ,gesund*, *heil* > *heilen ,heil*, *gesund machen* など)。先行研究では *-igen* で終わる動詞が特別な扱いを受けることもあるが (Klein/Solms/Wegera 2009, Leipold 2006)、接尾辞 *-ig* を伴う形容詞から形成されたものと解釈できる場合が多い (*ôtmüetec ,demütig* > *ôtmüetegen ,sich demütigen*、*schuldec ,schuldig*, *verpflichtet* > *schuldigen ,beschuldigen* など)。

従来の研究ではあまり注目されていなかったが、*-ig* だけでなく、*-haft*, *-valt*, *-lich* を伴う有接尾辞形容詞も動詞の基体になりうる。もっとも、Referenzkorpus *Mittelhochdeutsch* に基づく調査では *-ig* を伴う形容詞から形成された動詞がずっと多い。独立した語彙素としては *-lich* を伴う形容詞も頻繁に現れるため、*-ig* を伴う形容詞は動詞形成との親和性が特に高いのだろう。Referenzkorpus *Altdeutsch* では、古高ドイツ語における *-ag/-ig* を伴う形容詞からの動詞形成がこれほど顕著でないので、有接尾辞形容詞からの動詞形成における *-ig* を伴う形容詞の優位性は中高ドイツ語期に確立したと言える。

古高ドイツ語の弱変化動詞には 3 類 (*-jan* 動詞 / *-ôn* 動詞 / *-ên* 動詞) の区別があるが、有接尾辞形容詞からは 2 類弱変化動詞が形成され、単純構造の形容詞からは 1 類弱変化動詞が形成されるのが典型だ。音声的重みの少ない *-ig* を伴う形容詞が動詞の基体として特に頻出することは、形容詞からの動詞形成において 1 類動詞の形成パターンが優位になったことを示唆する。現代ドイツ語の形容詞からの動詞形成では幹母音の変音という 1 類弱変化動詞形成特有の現象が多く起こる (Wellmann 1973) こともこれと矛盾しない。

ブース発表 I (14:30～16:00)  
G会場 (C21 教室)  
(ブース発表は途中での出入り自由です)

ゲーム的要素を取り入れた参加型授業の試み

村元 麻衣

ゲーテ・インスティトゥートの教員養成講座において「学びを楽しむことで、学習効果は上がる」と繰り返し教わった。また、内発的動機づけを高めると言われる「有能性」「自律性」「関係性」を刺激する方法の1つとしても、ゲーム的要素を取り入れた授業方法は、1. 楽しみながら有能性を実感することができる、2. 自律的に授業に参加しやすい環境ができる、3. それがクラスという関係性の中で成立する、という3つの点において、学習効果が期待できる。

本発表では、学習者が学びを楽しむための仕掛けとして、ゲーム的要素を取り入れた学習方法を、参加者と共に体験するワークショップ形式で提示する。最終的には、ワークショップによる共同作業の体験から、参加者それぞれの授業方針、学習者、授業目標などに対応する方法を選択・加工し、授業に導入していけることを目標とし、具体的に授業のどのような場面に導入していけるのか議論する。そこで浮かび上がる問題点や改善点についてもさらに意見交換する。なお、この発表で紹介するゲームやインターネットを用いたプログラムは、ゲーテ・インスティトゥートの教員養成講座で学んだものを、発表者自身が授業の中で日本人学習者向けに加工したものである。

授業にゲーム的要素を取り入れることで、受講回数の少ない初級学習者や、発話への不安を感じる学習者、また友達以外のクラスメイトと打ち解けにくい学習者であっても、不安やためらいから解放され、学習過程自体を楽しみながら自信をつけていけることが観察された。こうした授業方法が、学生たちの自律性や積極性の向上に有用であることを示したい。

ブース発表 II (14:30~16:00)  
H会場 (C22 教室)  
(ブース発表は途中での出入り自由です)

## **Universitärer Fachunterricht „Didaktik“ auf Deutsch am Ende der Grundstufe**

Carsten Waychert

Im Rahmen des universitären Lehramtstudienganges (教職課程) bietet die Deutsche Abteilung der Kyoto Sangyo Universität einen viersemestrigen Didaktikkurs (ドイツ語教育法 I-IV) an. Die ersten beiden Semester sind für Studierende, die eine entsprechende Lizenz erwerben wollen, verpflichtend und werden seit April 2017 von mir unterrichtet.

Wesentliche Inhalte meines auf Deutsch durchgeführten Unterrichts sind dabei die Reflexion über das Lernen, die Analyse von Unterricht sowie von Übungen und Aufgaben aus Lehrbüchern, die Unterrichtsplanung und Vorbereitung auf eine Lehrprobe.

In dieser Kabinenpräsentation möchte ich zunächst die Kursinhalte sowie meine Vorgehensweise vorstellen. Anschließend plane ich, mit den anwesenden Kolleginnen und Kollegen innerhalb einer längeren Workshop-Phase in Diskussion zu treten:

1. An verschiedenen Stationen werden von mir Unterrichtsmaterialien zur Verfügung gestellt, zu denen die Kollegen in kleinen Arbeitsgruppen kritisch Stellung beziehen.
2. In der Abschlussdiskussion sollten u.a. folgende Leitfragen angesprochen werden:  
Wie würden die anwesenden Kollegen vorgehen, wenn sie selbst einen entsprechenden Didaktikunterricht gestalten müssten? Wo liegen die Möglichkeiten und Grenzen eines solchen zielsprachigen, handlungsorientierten Fachunterrichts? Wie ließen sich Unterrichtsprozesse empirisch beforschen, um letztendlich eine hohe Qualität der Ausbildung zu gewährleisten?

ポスター発表 (14:30~16:00)  
I会場 (C32 教室)  
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

外国語学習に対する動機づけを高めるための学習活動の試み

今井田 亜弓

自己決定理論 (Self-Determination Theory:SDT) (Deci & Ryan 1985, Ryan & Deci 2002) では、動機づけが高まる前提条件として、自己決定における基本的な欲求 (自律性、有能性、関係性) の充足を想定している。廣森 (2006) は、「英語学習における心理的欲求尺度」、「英語学習における動機づけ尺度」を用いたアンケート調査の結果から、学習者の有能感の認知と関係性の欲求が動機づけの各タイプ (内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れ的調整) に強い影響を与えており、これら心理的欲求を満たすことを意図した英語学習活動を一定期間行なうことにより学習者の動機づけを高めることが可能であるとしている。

また、英語以外の6言語における動機づけ調査 (藤原 2015) では、動機づけの段階性が認められ、理論が想定するように、自己決定度の高い「内発的動機づけ」と「同一視的調整」は、3つの心理的欲求、とりわけ有能感と自律性により高い相関を示したことにより、ドイツ語教育分野においても自己決定理論の適用が可能であるとしている。

本発表においては、1年間のドイツ語学習を終えた大学生を対象に、「心理的欲求尺度」、「動機づけ尺度」 (藤原 2010) を用いた質問紙調査を行い、心理的欲求が動機づけにどのような影響を与えているか、また教育的介入 (本調査ではポートフォリオを1年間実施) によって動機づけを高めることができるかについて、上記調査結果と自由記述の分析をもとに考察する。

コミュニケーション型な教科書を使用するドイツ語学習者が感じる学習効果— 質問紙調査とインタビュー調査結果のテキストマイニングによる分析

梶浦 直子

本発表の目的はコミュニケーション型・アプローチに基づいたドイツ語教科書を使用する学習者が、ドイツ語学習の効果をどのように感じるのかを質問紙調査とインタビュー調査によって明らかにすることにある。ドイツ語学習においてコミュニケーション能力の習得は、教師、学習者の双方から望まれ (日本独文学会 2015)、コミュニケーション能力の習得を目的とした教科書は学習者から好意的に受け止められている (藤原 2017)。一方で日本語を母語とするドイツ語教師はコミュニケーション型・アプローチに基づいた教科書を扱いつらいと感じる傾向にあることが報告されている (梶浦 2017、Bachmaier 2017)。

発表者が勤務する南山大学では2017年4月に外国語教育センターが設立され、1年次にCEFRのA1レベルという第2外国語教育の学習目標が設定された。それに伴いドイツ語授業にはコミュニケーション型・アプローチに基づいた統一教科書が採用された。そこで発表者は、2017年度に約200名のドイツ語履修者を対

象として質問紙調査を実施した。また、調査結果から選出した様々なタイプの学習者に個別インタビューを行った。本発表ではテキストマイニングのソフトを使用して作成した頻出語リストとそれらの言葉の結びつきを表す共起ネットワーク図を示すことで、学習者が感じるドイツ語学習の効果と課題を考察する。

第2日 9月30日(日)

シンポジウム IV (10:00~13:00)  
A会場 (C13 教室)

国民国家と「村物語」— 19世紀後半のドイツ語圏文学およびイタリア文学をめぐる地理的想像力  
**Nationalstaaten und „Dorfgeschichten“. Geographische Imaginationen der deutschsprachigen und italienischen Literatur im späten 19. Jahrhundert**

司会：七字 眞明

しばしば19世紀はナショナリズムの時代であったといわれる。しかし、それは決して地域間の単なる分断や没交渉を意味していたわけではない。言語や文化を単位とする「国民」や「民族」をめぐる大きな歴史＝物語が精力的に紡がれていくその背後では、産業化と資本主義を原動力とするグローバル化が急速に進展し、世界の各地で無数の相互依存と相互干渉の関係が切り結ばれていた(Osterhammel 2011)。

農村から都市への人口移動と国境を越えた世界規模の交通というこの社会的・政治的変動に呼応して、文化の領域では〈大都市〉や〈植民地〉を舞台とするリアリズム小説が興隆するが、同時にこのとき、世界の片隅に位置する〈田舎〉を題材とする大量の物語群が生み出されたという事実を忘れてはならない(Berbig/Göttsche 2013)。辺境に暮らす農民の狭隘な生活世界を描き、ドイツ語圏では一般に「村物語 Dorfgeschichte」と呼ばれたこの文芸ジャンルは、19世紀中葉のヨーロッパにおける大流行を経て、のちの「郷土文学 Heimatliteratur」の母胎となったものである。広大な国土の一角に過ぎない片田舎を主題とする文学の需要が、まさしく国民国家の形成期に高まるという一見ねじれたこの構図を、「民衆」の中に「民族」の本質を求めるロマン主義のイデオロギーから説明することは容易だろう。しかし、産業化の時代の農村には「社会問題」という新たな局面が付随すること、さらに、帝国内部に複数のスラヴ系民族を抱えるオーストリアや連邦制の伝統を持つスイスでは、そもそも国民国家の理念／イデオロギーが持つ位置価値がドイツ帝国の場合とは大きく異なっていたことに鑑みれば、この時期の「村物語」への関心の急騰はそれ自体として注目すべき現象であり、とりわけ地域別の比較検討に値する争点として浮上する。

近年では、とくにイタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグの「ミクロストーリー」をめぐる理論的枠組みにおいて、西欧の近代化を脱中心的に問い直す歴史学や人類学との学際的連携を視野に「村物語」の再評価が進んでいる(Neumann/Twellmann 2014)。本シンポジウムはこうした最新の研究動向も踏まえたうえで、19世紀後半の文学作品を例に、個々の〈村〉と〈国民国家〉を媒介する弁証法的な理路がどのように構想され、実践され、あるいは挫折していたのかを明らかにする試みである。ドイツ帝国成立の中心となったプロイセンに加え、帝国と少数民族によるナショナリズムとの摩擦に揺れる多民族国家ハ

プスブルク、連邦制の永世中立国として国際政治の中で独特な位置に立つ多言語国家スイス、さらにはドイツと同じく長らく小国分裂の状態にあり、一般に「リソルジメント Risorgimento」と呼ばれる民族運動を経て 1860 年代に国家統一を果たしたイタリアの事例をも視野に収めて、テキストをめぐる地理的な差異（それが成立した地域とそこに描かれた土地）を焦点化する比較分析をおこなうことで、当時の文学が展開した地理的想像力の政治的射程を探ってゆく。

## 1. 「鉄道沿いの村」への帰郷 — ベルトルト・アウエルバッハの「村物語」あるいは「美化」の閉域

西尾 宇広

19 世紀に最も読まれた書き手の一人であるユダヤ系ドイツ語作家アウエルバッハ (1812-82) は、1830 年代にみずからの出自を前面に押し出したゲットー小説によってデビューすると、40 年代にはその主題を封印して「村物語」へと転向する (Twellmann 2014)。ユダヤ性の問題意識を抑圧しつつ、来たるべき統一ドイツに宗教的寛容を仮託するというその戦略的選択を、彼は詩論的著作『書物と民衆』(1846)において、現実を「美化 Verklärung」する物語によって〈故郷と異郷〉を媒介し、「国民的な中心」を持たないドイツ人の集合的アイデンティティを弁証法的に構想する、という理論的展望として定式化した。ここには「村物語」というジャンルと国民国家への願望との密接な連関が確認できる。事実、農村の厳しい現実を告発する社会批判的傾向の強い初期作品『黒い森の村物語』(1843-54)に対し、ドイツ帝国の成立(1871)後、郷里の村に鉄道が通り、名実ともにそこがドイツの一部となったときに書かれた続編『三十年後 新しい村物語』(1876)では、一転して国家統一の実現が言祝がれるなど宥和的な色彩が強い(山口 2006)。本発表では、とりわけ従来の研究が軽視してきた後者の「村物語」に光をあて、作者が求めた新たな社会像に内在する葛藤、すなわちユダヤ人の同化への期待と、彼らを人種として排斥する近代的反セム主義の台頭という新しい〈ドイツ〉をめぐる矛盾が、「美化」されぬままにテキストに残存しているさまを明らかにする。

## 2. 帝国とモラヴィアの二つの「家」 — マリー・フォン・エーブナー＝エッシェンバッハ『ボジェナ』における忠実な「女中」

麻生 陽子

オーストリア＝ハンガリー帝国崩壊の兆しが現実味を帯びた 19 世紀後半は、「女中」への社会的関心が高まった時代でもあった (Eblinger 2013)。ドイツ語圏で最初の「女中小説」となったエーブナー＝エッシェンバッハ (1830-1916) の長編小説『ボジェナ』(1876)では、チェコ語圏モラヴィアの大都市に住むドイツ系市民の「ハイセンシュタイン家」の内部崩壊の危機に、チェコ人女中のボジェナが穏便かつ強制的に介入し、一家に秩序をもたらす。

主人公ボジェナについては、「真実への愛」をはじめとする作者の理念にそく

して解釈されてきた (Wandruszka 2008)。「忠臣」を描く一連のオーストリア文学との関連も指摘されているが (Schüppen 1997)、「女中」という観点やその民族的立場づけにかんする考察はわずかである。本発表では、社会的・民族的・ジェンダー的に従属的な立場にある忠実なチェコ人女中が「オーストリア家」の体制秩序を維持する「忠臣」を彷彿とさせる人物として肯定的に造形されながらも、社会的上昇が閉ざされたまま女中にとどまることの意味を問う。モラヴィアは急進的なナショナリズムが展開されたボヘミアとは異なる文化圏だったこともあり、三月後期の後も異なる階級や民族が共存しうる場所として構想されている。しかしその調和的世界の背後にある民族的な不平等性も見逃しがたい。そこには、チェコ的なものに共感しつつも帝国崩壊を危惧したオーストリアの知識人としての作者の見解も描きこまれている。

### 3. スイス、ポーランド、イタリア — ゴットフリート・ケラー『馬子にも衣装』における共生形態の模索

磯崎 康太郎

ゴットフリート・ケラー (1819-90) の『ゼルトヴィーラの人々』第二巻の最初の物語『馬子にも衣装』(1874) は、彼の 15 年に及ぶ政治的実務を経て発表された作品である。これまでの研究では、衣服等の象徴的なモチーフ、小説の構成原理や語り口に注目が集まり、政治的観点からの考察は多くないが、物語の主人公である「ポーランド人」については、同時代的背景としてのポーランド情勢や、この作品で理想化されたポーランド像の意味が考察されてきた (Rudolph 2002; Kneip/Mack 2003)。イタリア像については作中での言及は少なく、一見些末な内容であるため、ほとんど注目されていない。私経済や資本主義の進展を厳しく批判したケラーは、人々の経済的関心の対極に政治的関心を位置づけ、政治的関心の非生産性をユーモラスに、そして一見批判的に描きながら、じつはこの点にスイスの伝統的な公共精神を接続させようとした。彼はポーランド像、イタリア像を用いて、新たに台頭する「民族的なもの」の苦境にも共感を示した。そしてこの共感、第三者的な立場でのそれに終始するものではなく、自分たちスイス人の地歩を見直すことに向けられている。すなわち、「民族的なもの」との協調のなかにスイスの歩むべき新たな道が模索されたのではなかろうか。これら一連の過程は、後発の民族主義に対する作家晩年の政治観の変化を告げるものでもある。

### 4. 地方の現実を「標準語」で自然に語る — ジョヴァンニ・ヴェルガ『マラヴォリア家の人々』の表現技法

霜田 洋祐

「真実主義 (ヴェリズモ)」を代表する作家ジョヴァンニ・ヴェルガ (1840-1922) は、短篇集『田舎の生活』(1880) や長篇小説『マラヴォリア家の人々』(1881) 等において、画一化の進む都市生活ではなく、北部主導の国家統一後に北部と

の格差が広がった南部シチリアの田舎の暮らしに目を向け、それを「飾らないありのままの事実」として客観的に描こうとした。そのために小説を綴る言語にも話し言葉の自然さが求められたが、芸術的・政治的理由から、地方の民衆を描きながらも方言の直接的使用は控えられ、文学語であったイタリア語に民衆的な口語の特徴を付与するという方法が選択された。シチリアの諺や格言を数多く導入したり、文学的でない素朴な比喻を多用したりして土地の人々の世界観を写し取ろうとする『マラヴォリア家の人々』の言語について、従来の研究は標準語の下に隠されたシチリア方言要素を強調する傾向にあったが、本発表では、その言語がシチリアにとどまらない汎イタリア的な話し言葉の特徴を多く備えようとする近年の研究 (Bruni 1999; 2016) にも着目し、地方のありのままの現実を地元の人々に視点を合わせつつ提示しようという本作が、どのような読者を対象に書かれたのかという問題に目を向けたい。それによって「真実主義」という特有の詩論と連動したヴェルガの言語表現が、より社会的告発の色彩の強い南部問題文学など後発の文学の範ともなっていることを示したい。

シンポジウム V (10:00~13:00)  
B 会場 (C15 教室)

ロマン派における「遊戯／劇 (Spiel)」の理念とその表現  
Die Idee des Spiels und deren Darstellung in der deutschen Romantik

司会：岡本 和子

本シンポジウムでは、「遊戯」とは、観客等を含めた広い意味での「共演者 (Mitspieler/ Gegenspieler)」との交流である、との考えに立ち、ロマン派の作家たちがこの交流空間をどのように構想し、作品にどのように表現したのかを探ることを目的とする。

ドイツ近代文学における「遊戯」理念の展開は、シラーの『人間の美的教育についての書簡』(1795)をひとつの出発点にしていると言える。シラーは、人間には時間的な変化に基盤を置く「感性的衝動」と永遠化を求める「形式衝動」という相対立する衝動があり、完全な人間においてはこの二つが「遊戯衝動」によって融合されると述べ、芸術こそがこの「遊戯」を担い、全的な人間の形成に寄与するのだとした。つまり、歴史の舞台ではいまだ実現されていない「全的な人間」を、遊戯空間としての芸術作品がユートピアとして示しうると考えたのである。

本シンポジウムが考察対象とする 18 世紀末から 1830 年代までのロマン派の作品は、こうしたシラーの遊戯の理念に対する、文学的実践の立場からの直接的あるいは間接的な応答として読むことができる。しかし、ここで考察対象とする四十年あまりは、ドイツが政治的・思想的に大きな揺らぎを経験した時期でもあり、ロマン派と呼ばれる作家たちのなかでも、「遊戯」の捉え方は変化していった。

フランス革命やナポレオン軍によって、自由な市民という理想とともに、暴力の発露や既存の体制の崩壊を突きつけられるなか、シラーの遊戯の理念を文学において実現しようという試みが現われた。ノヴァーリスは「動的」で「偶然性」をともなう新しい存在のあり方を模索し(第一発表者：高橋)、フリードリヒ・シュレーゲルは、文字メディアに収れんしつつあった文学作品を、他ジャンルの芸術との交流の場と見なそうと試みた(第二発表者：二藤)。

しかし、19 世紀初頭のドイツでは「喜劇」がほとんど成功しなかったことが示すように(第三発表者：岡本)、遊戯の理念を個別の文学作品に結実させることは容易ではなかった。また実際の社会においても、自由な市民どうしが交流する空間が夢見られたのはほんの束の間で、1814 年にははやくも復古体制が確立される。そうしたなかで、シラーが掲げた「全的な人間」や「ユートピアとしての芸術作品」といった考えに距離をとる作家が出てきた。とはいえ、遊戯の理念は捨て去られたわけではなく、むしろ文学的営為の方法として拡張されることとなった。E. T. A. ホフマンは、シラーが前提とするような「近代的主体」の問い直し作業には遊戯的な態度が必要だと考え(第四発表者：土屋)、他方ア

イヒェンドルフは、創作者と受容者の交流にこそ遊戯空間を見出そうとしたのである（第五発表者：須藤）。

## 1. 「神も遊戯するのではないか？」— ノヴァーリスにおけるシラーの遊戯概念の受容

高橋 優

本発表は、シラーの美学の中核を成す „Spiel“ の概念がノヴァーリス（フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク）においてどのように受容され、展開されていくかを明らかにすることを目的としている。ノヴァーリスは『フィヒテ研究』（1795/96）において „Sein“ を „erstes Spiel“ と表現し、フィヒテのように自我を絶対視することを避け、あくまでも動的、偶然的な „Sein“ のあり方を探り、絶対性の追求を放棄することで真に自由な自我の活動が可能になる、という確信に至る。彼はさらに „Spiel“ の概念を拡張させ、「神も遊戯するのではないか?」「神聖な遊戯」といった言葉を用い、世界そのものを神の遊戯の場として想定する。また「神に至る実験」や「遊戯とは偶然を用いた実験である」という言葉からわかるように、自らの創作行為を神の遊戯の模倣とみなしている。『ザイスの弟子たち』（1798）における鉱物を並べるゲーム、『クリングゾール・メルヘン』（執筆 1800）における劇中劇はその典型的な例であると言える。シラーの „Spiel“ 概念への取り組みが、「新しい神話」「新しい聖書」として展開されるノヴァーリスの創作活動の重要な契機になっていること、さらに初期から後期へと至るロマン主義文芸活動における遊戯性、偶然性の重視がノヴァーリスにおいていち早く理論的に構築されていることを本発表で示す。

## 2. 絵画芸術として並ぶ「断章集」— フリードリヒ・シュレーゲルによる〈遊戯〉の実践として

二藤 拓人

文字メディアが中心化する 1800 年頃の文化において、芸術による〈遊戯／劇〉の場は文学空間（つまり書物の黙読）へと移行・集中していたとされる（Kittler 1978, 1980）。これに従って発表者は、対話篇、小説、詩、箴言、旅行記、評論など多彩な文体・表現からなる初期ロマン派の『アテネウム』（1798-1800）が、別の芸術ジャンルにおいて別様に生じうる美的体験を、文学という遊戯の場で再現しようとした作品であると考え。この仮説は、当雑誌が「切り離されたあらゆる創作（Poesie）のジャンルを再び一体にする」というロマン派の基本理念の実践といえる点、更にここでフリードリヒ・シュレーゲルが Poesie を詩・文学としてだけでなく、演劇、音楽、彫刻、絵画といった芸術ジャンルを越境し融合するモチーフとしても構想している点からも説明可能である。

以上に基づき本発表では、当時の文芸に様々な遊戯性が混在していた可能性について、特に絵画と詩・文学との関連に限定して検証し、ジャンル間交流としての遊戯がもつ意義をシュレーゲルの文学的实践から考察する。その際、上

記の雑誌における代表作「断章集」(1798)に焦点を当てる。本発表は、このアフォリズム集の提示する受容形態が絵画芸術を鑑賞する環境と視覚的な効果の面で類比関係を見出せることを、一方で初期シュレーゲルのジャンル文芸論に依拠しながら、他方で「断章集」から実際に幾つかの断章を読み通す実演(読解)を通じて論証したい。

### 3. ロマン派による喜劇の試みとその射程 — クレメンス・ブレンターノ『ポンセ・デ・レオン』をめぐって

岡本 和子

「遊戯」という理念が文学においてもつ意味的な広がりの中で、「演劇(Spiel)」という文学形式は大きな位置を占めると言えるが、ロマン派の演劇作品(とくに喜劇)で成功をおさめたものはきわめて少ない。本発表では、その根拠はドイツ市民社会の政治的未成熟さに求めることができるのではないかと、という仮説をたて、クレメンス・ブレンターノの初期作品『ポンセ・デ・レオン』(1803)を具体的な考察対象として、その検証を試みる。つまり、「遊戯とは一定の規則の内部でみずからと対等な他者を相手としてなされる交流行為である」と考えた場合、ドイツの歴史の舞台においては、そのような対等な他者との対話は阻害されており、その写しが喜劇作品およびその不成功に反映されているのではないかと、ということである。この検証の過程では、初期ロマン派が追究した「遊戯的思考」の実現は、「長篇小説」あるいは「断片」というロマン派に特有のものとして研究上すでに承認済みの形式にのみ可能だったのか、という問いにも迫り、個別作品としては「上演に値せず」と見なされた喜劇が、形式として有していたであろうポテンシャルを呈示したい。これは具体的には、本作品の具体的な後継であるビューヒナーの『レオンスとレーナ』(1836)に何が引き継がれているかを分析することによってなされる。

### 4. 近代的主体の崩壊と再構成される場としての遊戯空間 — E.T.A.ホフマンの『ブランビラ姫』をめぐって

土屋 京子

シラーの遊戯概念は彼の人間学と美学、それに係わる理想的芸術家像のなかで理解されるべきものであり、いわゆるカント哲学の近代的主体を大前提としている。ケーニヒスベルク時代よりカントから距離を取っていたE.T.A.ホフマンは、むしろ近代的主体の揺らぎに強い関心を抱き、芸術家の「想像力の戯れ」を創作原理とし、「遊戯空間」自体を混沌とした実験的な活動空間としてテーマ化した。1820年に書かれた『ブランビラ姫』では、物語内で繰り広げられる「大胆で気まぐれなSpielに身を委ねよう」とする読者に向けて、編集人として登場するホフマンは「より高次の自己認識へと至るためには、自己省察に基づく「理念」によってSpielを統べる必要がある」旨を説く。そして難解な筋で知られる枠内物語では、一対の男女が、カーニバルという非日常的空間の「劇場と呼ば

れる小さな世界のなか」で „Spieler“ としてのもう一人の「自我」を見だし、無我の境地にいたると同時に自己同一性を喪失するが、互いの „mein Spiel“ を見ることで真の自己認識を得るという筋立てになっている。このようにしてホフマンは、シラーが「人間性の条件」とし主観内部の創造的活動の領域とした „Spielraum“ をアイロニカルに扱いつつ、遊戯によってもたらされる新たな自己認識の可能性を彼独自の人間学として提示していることを、発表のなかでつぶさにみていく。

## 5. 「民衆とは遊び場であった」— Spiel 概念の変容とアイヒェンドルフの Volk 観

須藤 秀平

本発表の目的は、19 世紀前半の社会状況の変化を受けてアイヒェンドルフが新たに提示した Spiel 概念を明らかにすることにある。ロマン派以前の世代に属するカントやシラーにおいて、Spiel は「自律」や「自由」の概念と結びつき、近代市民社会が要求する目的合理性や実用性に対するアンチテーゼとして機能しえた。しかし、そうした現実社会と Spiel の二分法は、アイヒェンドルフにおいてはかならずしも成立しない。彼は芸術と社会のあいだに葛藤を感じつつも、その両者の結びつきを絶えず意識し、その立場から Spiel に新たな意義づけを試みている。彼は Spiel を、観客を前にしたポエジーの再現として、さらには広く創作者と受容者を接続する行為として意義づけることで、二つの異なる世界を仲介する機能をそこに見出すのである。

こうした Spiel 概念の歴史的変容と、それに関連したアイヒェンドルフの時代認識について、本発表では「民衆 (Volk)」をキーワードに取り組む。アイヒェンドルフは後期の文学論のなかで、「民衆」自体を「遊び場」とみなすという一風変わった民衆観を提示した。それにより彼は Volk を複数の社会層が結びつく交流空間として意義づけ、それを「俗物」へのアンチテーゼとして理想化している。本発表では、こうした Volk や Spiel の捉え方が「芸術時代の終焉」を迎えた 1830 年代のアイヒェンドルフ作品にどのように反映されているかを、短編小説『空騒ぎ』(1832) とその周辺のテクストを中心に考察する。

口頭発表：文学 III (10:00~12:35)  
C 会場 (C23 教室)

司会：Marcus Conrad・林 久博

**1. Thomas Bernhard in der Schule – Ein Machtkampf zwischen Schule und Literatur**

Atsushi Imai

In seiner autobiografischen Erzählung *Die Ursache* (1975) provozierte Thomas Bernhard mit der Behauptung, „die sogenannten Mittelschulen“ seien „längst als Verrottungszentren der menschlichen Natur erkannt“. „Die Welt wäre besser daran“, wenn sie sie „abschaffe“. Sein Verdikt scheint inzwischen vergessen zu sein. Meint man vielleicht, dass er hier wieder einmal übertrieben habe? Was auf den ersten Blick herausforderte, war aber eigentlich nicht neu. Sein Angriff auf die Schule als „Menschen verziehende“ Institution erinnert an die schulkritischen Texte der Literatur der Jahrhundertwende: Thomas Manns *Buddenbrooks*, Hesses *Unterm Rad*, E. Strauß' *Freund Hein*, Musils *Törless* und vor allem Heinrich Manns *Professor Unrat*.

Bernhard selbst lernte in zwei Arten von „Schulen“: in öffentlichen Schulen: Volksschule, Hauptschule und Gymnasium, und in der „Schule“ seines Großvaters Johannes Freumbichler, eines verkannten Salzburger Heimatdichters, der den Enkel maßgeblich mit einer Weltanschauung beeinflusste, die in mancher Hinsicht Wertvorstellungen der dominierenden Gesellschaftsschichten widerspricht. Bernhard resümierte, er sei in der Schule seines Großvaters „gegen alle konventionellen Schulen erzogen worden“. Die Erziehung beim Großvater war eine rebellische, philosophisch-künstlerische, sozusagen „literarische“. So könnte man Bernhards Konflikt mit der „konventionellen“ Schule als stellvertretend betrachten für den Machtkampf zweier gesellschaftlicher Kräfte, der beherrschenden und der opponierenden.

**2. Hinduistisches Gedankengut in Goethes Wilhelm Meisters Wanderjahre – das Wesen der Makarie**

Evelyn Zraggen

Über Makarie steht in Goethes Wilhelm Meisters Wanderjahre wie folgt geschrieben: „An der Stelle ihres herrlichen Angesichtes sah ich zuletzt, zwischen sich teilendem Gewölk, einen Stern blinken, der immer aufwärts getragen wurde und durch das eröffnete Deckengewölbe sich mit dem ganzen Sternhimmel vereinigte.“<sup>(1)</sup> „Sie erinnert sich von klein auf ihr inneres Selbst als von leuchtendem Wesen durchdrungen, von einem Licht erhellt, welchem sogar das hellste Sonnenlicht nichts anhaben konnte.“<sup>(2)</sup>

Da Goethe Übertragungen von Vorlesungen und Übersetzungen der *Bhagavad-Gita* in den Jahren 1808, 1815, 1824, 1825 und 1826 studierte und das Buch *Ardschuna's Reise zu Indra's Himmel* (1824) besaß, war er mit diesen Texten beim Verfassen des Romans vertraut.<sup>(3)</sup> Im letzteren Buch werden verstorbene Seelen die sich in den Himmel erheben von der Erde aus als Sterne wahrgenommen.<sup>(4)</sup>

Meine These lautet, dass Goethe die Idee der „als Sterne wahrgenommenen Seelen“ von hinduistischem Gedankengut übernahm und sie zur Beschreibung der Makarie anwandte, die ein ebenso leuchtendes Wesen darstellt.

1) FA I, 10, S. 386

2) FA I, 10, S. 734

3) 1807-1810 schrieb Goethe bereits am Roman. 1821 erschien die erste, 1829 die vollständige Fassung.

4) *Ardschuna's Reise zu Indra's Himmel*, S. 3

### **3. Der Einsiedler als Vorbild eines Gläubigen – Zum rein erbaulichen Element in Grimmelshausens „Simplicissimus Teutsch“**

Yuya Morishita

Durch „Der abentheuerliche Simplicissimus Teutsch“ (1668) hat Grimmelshausen die Menschen seiner von jahrzehntelangen Krisen geprägten Zeit von Grund auf ermahnt. Vor diesem Hintergrund hat Rolf Tarot die These aufgestellt, dass Grimmelshausen sich zum Ziel setzte, als Erbauungsschriftsteller die Frömmigkeit seiner Leser zu stärken. (Tarot, 1979) Diese Ansicht könnte besonders dann tragfähig sein, wenn man den Roman vorwiegend als die Bekehrungsgeschichte des Simplicius betrachtet. Das wiederholte Scheitern des Bekehrungsprozesses von Simplicius erlaubt diese Perspektive indes nur eingeschränkt. Deswegen ist es entscheidend, das enge Verhältnis zwischen ihm und seinem Vorbild, dem Einsiedler, in den Brennpunkt der Untersuchung zu setzen. Dabei ist durchgehend zu beachten, dass es eine deutliche Spannung gibt zwischen den mit größter Ernsthaftigkeit eingebrachten Erbauungsaspekten und der humorvoll-satirischen Eigenart des Schelmenromans. Dabei vertrete ich den Standpunkt, dass die andächtige Einsiedler-Figur, zugleich Simplicius' Vater, als das Vorbild eines Gläubigen das Verhalten des Sohnes kontinuierlich beeinflusst. In dieser menschlichen Beziehung lassen sich die eigentlich erbaulichen Elemente des Romans identifizieren. Die Figur des Einsiedlers enthält eine ganz wesentlich auf der christlichen Frömmigkeit beruhende Botschaft an die zeitgenössische Welt, die im krisenhaften Umfeld Zuversicht und Hoffnung aufgegeben hatte.

### **4. Frühe Filmschaffende als weltpolitische Impulsgeber in Neuerscheinungen der deutschsprachigen Erzählliteratur**

Andreas Wistoff

Zwei literaturwissenschaftlich bemerkenswerte Romane aus den Jahren 2014 und 2017 bearbeiten die Verknüpfung von früher Filmkunst und Politik am Vorabend des Faschismus auf erzähltechnisch brillante, völlig unterschiedliche Art. An der historisch wichtigen Grenze zwischen Demokratie und Diktatur in Europa findet der kunstgeschichtlich revolutionäre Wechsel vom Stummfilm zum Tonfilm in den USA statt, den Filmkünstler in Deutschland und Japan als künstlerischen Niedergang interpretieren. Gleichzeitig bemühen sich Politiker um die Nähe zur Filmkunst, in der auch politisches Handeln indirekt und massenwirksam ausgeübt wird. Diese Spannung von Kunst und Politik, den Weg vom Filmstudio in die Weltpolitik in Großbritannien und den USA, in Japan und Deutschland behandeln Michael Köhlmeier 2014 in "Zwei Herren am Strand" und Christian Kracht 2017 in "Die Toten. - Der Vortrag zeigt die

dichterischen Realitäten in ihrer Verbindung von Faktizität und Phantasie, analysiert die Erzählstruktur und stellt dar, wie beide Werk mit politischen Implikationen, die unter der Handlungsebene in ihrer inhaltlichen und erzähltechnischen Verbindung zum Film neue, literaturwissenschaftlich attraktive Blicke auf die westliche Welt um 1930 eröffnen.

シンポジウム VI (10:00~13:00)  
D 会場 (C25 教室)

時事劇と寓意劇のあいだ — Rieser 時代から Wälterlin 時代のチューリヒ劇場  
*Zwischen Zeitstück und Parabel – Das Schauspielhaus Zürich in der Rieser- und Wälterlin-Ära*

司会：葉柳 和則

「ナチス時代のドイツ語圏における唯ひとつの自由の砦」、「第二次大戦期のブレヒト作品初演」、「フリッシュとデュレンマットの輝かしい成功」。チューリヒ劇場の歴史は、数多の伝説とともに語られ、スイスの国民的記憶の一部を形作ってきた。しかし、こうした伝説の歴史化は、この劇場に関する言説の定型化を生み出し、背景や内実が十分に問われることなく文学史の中に登録されることにもつながっている。

チューリヒ劇場の歴史に関する研究もまた、多かれ少なかれ劇場の伝説化に影響を与えてきた。Curt Riess の *Das Schauspielhaus Zürich* (1963) に典型的に見られるように、ナチス時代に亡命を経験した知識人が劇場の通史を執筆することで、その叙述は彼らの個人史と不可分なものとなっていく。しかしこの傾向は、Ute Kröger と Peter Exinger 編著の *In welchen Zeiten leben wir* (1998) の出版を境にして背景に退いていく。1990 年代末に、第二次世界大戦期のスイスの「克服されざる過去」についての大規模な調査が国家プロジェクトとして実施されて以降、スイス史における脱神話化の傾向が顕著になった。文学史叙述においても、たとえば Ursula Amrein の *Los von Berlin!* (2004) は、綿密なアーカイブ調査に基づいて、チューリヒ劇場の歴史の書き換えを試みている。

しかし、1990 年代以降のチューリヒ劇場研究は、歴史環境との関係に力点を置いているがゆえに、上演された戯曲を詳細に分析するという姿勢が乏しくなるきらいがある。本研究グループが 2015 年に開催したシンポジウム「チューリヒ劇場と文化の政治」（日本独文学会秋季研究発表会、鹿児島大学）もまた、スイスの愛国的文化運動、「精神的国土防衛」との関係においてチューリヒ劇場の歴史を描き出す試みにとどまっており、そこで見出された知見を個々の戯曲に立ち戻って検証するには至っていない。

以上の経緯を踏まえ、今回のシンポジウムでは、2015 年に呈示した時事劇と寓意劇という二つの戯曲形式の関係性が、劇場の外部の歴史・社会的要因が作り出す布置の中で変容する過程を個々の戯曲に焦点を当てて解明する。具体的には、①チューリヒ劇場の歴史のうち、劇場の基本スタイルが生まれ、定着していく時代、すなわちドイツからの亡命知識人を劇場に受け入れたフェルディナント・リーザーがオーナーにして総監督であった時代（リーザー時代、1933-1938）、②アメリカに亡命したリーザーの後を継いでオスカー・ヴェルターリンが総監督を務めた時代（ヴェルターリン時代、前期 1938-1945、後期 1945-1961）を取り上げ、それぞれの時代の代表的戯曲の内部構造とその歴史・社会的意義を確認する。

## 1. Los von Berlin? チューリヒ劇場とベルリン演劇

市川 明

フェルディナント・リーザーが総監督だった 1933 年から 38 年におけるチューリヒ劇場について論じる。1920 年代のベルリンで、ピスカートアやイエスナーのもとで仕事をしてきたリントベルクやシュテッケル等の演劇人は、ヒトラーの政権獲得後、亡命を余儀なくされる。リーザーは彼らをスカウトし、「亡命者・ユダヤ人・マルクス主義者」劇場が形成された。チューリヒでは、精神的国土防衛との関連でベルリンに対する敵対像のようなものがあった。ベルリン演劇が持っていたモダニズムがどのように移植され、独自の光を放ったのか、先行研究 (Mittenzwei: *Das Zürcher Schauspielhaus 1933-1945*, Amrein: *Los von Berlin!*) を補う形で、「ベルリンからの解放」について論じる。

チューリヒ劇場は 1933, 34 年に、ユダヤ人問題をテーマにした二つの時事劇、ブルックナーの『人種』と F. ヴォルフの『マンハイム教授』(原題『マムロック教授』) を上演している。作品や上演を分析し、上演をめぐるファシスト(国民戦線)との騒動に言及する。更にデンマーク亡命中のブレヒトがチューリヒ劇場に売り込んだとされる寓意劇『まる頭ととんがり頭』(1933/38)や、当劇場初演のフリッシュの『アンドラ』(1957/61)を考察し、時事劇と寓意劇のあいだを探る。

## 2. 『月は沈みぬ』チューリヒ上演のインパクト — ドイツ語版台本を手がかりに

葉柳 和則

ジョン・シュタインベックの戯曲『月は沈みぬ』(1942, ドイツ語版: 1943) は、軍事的な大国による北方の小国の占領とそれに対するレジスタンスをテーマにした寓意劇である。この作品は第二次世界大戦期のチューリヒ劇場において最多の上演回数を記録した。ナチス・ドイツによる占領の可能性を意識し続けてきたスイスにおいて、この上演が持っていた文化史的意味を解明することは、チューリヒ劇場研究の課題たりうるはずである。しかし、Werner Mittenzwei の *Das Zürcher Schauspielhaus 1933-1945* (1979) を唯一の例外として、この戯曲はほとんど研究されていない。アダプテーション研究の手法が確立されるまで、翻訳や翻案の研究は二次的な位置にとどまってきたことが、この集合的忘却の背景にある。この戯曲のドイツ語訳が出版されなかったことも忘却の理由の一つである。

本報告は、アーカイブ調査によって確認した 1943 年当時の上演用シナリオに基づいて、この戯曲の歴史的・文化的位置を探り、結論として、①『月は沈みぬ』は、寓意劇/時事劇という視点から見たとき、ヴェルターリン時代のチューリヒ劇場のドラマトゥルギーと親和性を持つこと、②この作品を構成する諸要素は、戦後のチューリヒ劇場で上演されたフリッシュやデュレンマットの作品の特質を先取りしていたことを提示したい。

### 3. アルカディアとしてのスイス

中村 靖子

長らくシラーは、「自由」の思想家であると同時に「一つの国民」という思想を代表する象徴的存在だった。ナチスに至るまで、また戦後もさまざまな陣営がシラーを自分たちのイデオログとして利用した (Frevert: 2007)。そのシラーの作品の中でも最も頻繁に上演されたのが『ヴィルヘルム・テル』である。それはドイツ国内においても、またナチス政権に脅威を感じるスイスにおいても、「一つの国民」を謳う愛国的な装置として利用されたのである。こうした動きに区切りを付けたのは、デュレンマットのシラー演説である。曰く、「政治によって自由は実現されない、少なくとも部分的にしか実現されない」と。

ドイツ語圏スイスは初期啓蒙主義以来、ドイツにとって「もう一つのドイツ」であり続けたが (Amrein: 2013)、戦後になるとスイスは、ナチス時代には「自由の砦」だったという自国像を創り出す。それはスイスという国の「中立性」を示してもいて、「精神的国土防衛」運動における架空の「国土」とも照応し合う。フリッシュの『学校版ヴィルヘルム・テル』は、このような「自由発祥の地」であり、その住人であるというスイス(人)像を解体する試みである。こうした「アルカディアとしてのスイス」を、スイス内部の発言から検証する (Frisch: 1946. Muschg: 2007)。

### 4. 寓意劇としての『聖書に曰く』 — ヴェルターリン時代のデュレンマット

増本 浩子

本報告では、デュレンマットの劇作家としてのデビュー作『聖書に曰く』(1947)を初演当時の文脈に置いた場合、この戯曲が第三帝国とスイスという二重の寓意性をもつものとして解釈できることを明らかにする。

まだ無名だったデュレンマットがチューリヒ劇場でデビューするという幸運に恵まれたのは、当時のスイス文学界・演劇界の「スイス化」の動きなしにはあり得なかった。第二次世界大戦中にはチューリヒにベルリンの演劇が持ち込まれ、チューリヒ劇場が反ファシズム亡命作家の砦となったのに対し、戦後はスイスの若い才能を発掘し、世に送り出そうという動きが顕著になったのである。

『聖書に曰く』は16世紀にドイツ北西部の都市ミュンスターに出現した再洗礼派王国を題材にしており、集団の狂気を問題にしている点でヒトラーの第三帝国の興亡を描いた寓意劇と解釈することができるが、初演における演出のために、精神的国土防衛によって守られるべき「スイス的なもの」を格下げする作品ともなった。つまり、再洗礼派王国の王(ヒトラーと二重写しになっている)の食べ物にされたミュンスター市長を、当時、ヴィルヘルム・テルを演じるならこの人と言われたスイスの国民的俳優ハインリヒ・グレートラーが演じたために、チューリヒの観客は「スイス的なもの」が貶められたと感じたのである。その結果、第三帝国の寓意であったはずの『聖書に曰く』は、スイスの寓意ともなったのだった。

## 5. 意味に抗う寓意劇 — マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火犯たち』 松鶴 功記

1958年チューリヒ劇場初演の『ビーダーマンと放火犯たち』は、ヴェルターリン時代最後のフリッシュ作品である。フリッシュを論じる場合、小説や物語は個人の問題、演劇やその他の散文は政治的というように、テーマが明白に別れる傾向にある。これに対して本報告は、散文、ラジオドラマとメディアを横断しつつ展開し、演劇へと至ったこの寓意劇を手がかりに、フリッシュ作品における個人的なものと政治的なものとの関連性とその特徴を探る。

フリッシュによれば、寓意劇とは意味-劇<Sinn-Spiel>であり、それは劇が生み出す抽象的<意味>を通して、複数の現実を多様に想起させる。同時に寓意劇は例証的の性質を持ち、教育・教訓的<意味>を免れがたい。しかし劇の副題 *Ein Lehrstück ohne Lehre* が示す通り、警告し教えても学ばないビーダーマンの行為は、教育・教訓的に<意味なし>である。不正を行ったという個人的意識が、それと関連のない別のできごとへの対処に影響を与える：これが散文「茶番喜劇」をはじめ一連のビーダーマン素材のテーマであり、彼が学ばないことの個人的原因である。「茶番喜劇」はチェコスロバキアの共産主義化とそれに対するスイス市民社会の冷めた反応に出遭ったことをきっかけに書かれた。寓意劇では逆に、寓意として想起される政治的なものを背景に、ビーダーマンの個人的な意識が演じられる（語られる）。

口頭発表：文学Ⅳ（10:00～11:15） / 文化・社会（11:20～12:35）  
E会場（C33教室）

司会：山本 淑雄・大塚 直

1. 青と白の露仏同盟 — カフカの断片『独身者ブルームフェルト』と＜東西ユダヤ人の夕べ＞

林寄 伸二

1914年7月、ドイツとオーストリア＝ハンガリー帝国がロシアと交戦状態に入った時、フランスは露仏同盟に従って両国に宣戦布告をした。意外なことに、1915年初頭に書かれたカフカの遺稿断片『独身者ブルームフェルト（仮題）』の中に、敵国となったフランスとロシアの同盟を歓迎するような箇所がある。

孤独な独身者ブルームフェルトが帰宅すると、二つのセルロイドのボールが家の中で落ち着きなく動いている。青と白の縞模様で、異なる動きをしながらつきまとうボールから気を逸らそうとして、フランス語の雑誌を開いたブルームフェルトは、ロシア皇帝とフランス大統領が握手する写真に魅せられ、「真実に忠実 *wahrheitsgetreu*」だと感じるのである。

フランス語雑誌『*Le Monde illustré*』（1914）掲載の写真を源泉とすると思われる、露仏同盟称揚シーンからカフカの政治性を読み取ろうとする C. Duttlinger（2007）に対し、本発表では、この箇所が価値観の異なる東西ユダヤ人たちの和解に対するカフカの個人的願望の投影として読み解けることを、二つのボールについての I. Bruce（2007）の新解釈、および当時カフカが通っていた＜東西ユダヤ人の夕べ＞についての佐々木（2004）の伝記研究等を援用して論証する。

この論証によって、カフカの異文化像に彼自身のユダヤ人問題が反映されていることの一部を明らかにすることができるだけでなく、カフカ文学における謎めいた国家元首像および助手像の解明のための重要な手がかりが得られる。

2. 第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について

竹岡 健一

ナチス時代の文学受容については、1933年から1945年間の本の刊行数などに基づいて、必ずしもイデオロギー的な著作一辺倒ではなかったとの指摘もなされており、その際、第二次世界大戦勃発以後、前線で戦うドイツ軍兵士の間で娯楽的な読み物の需要が著しく高まり、啓蒙宣伝省がそれに呼応する対策をとったことが特に強調されている。そうした研究にイデオロギー重視の考察では捉え難い有益な知見が多々含まれていることは確かであり、兵士が娯楽的な本を求めたということももっともなことのようと思われる。だが、啓蒙宣伝省の前線兵士向け推薦図書リストの内容や、同省が推進した野戦郵便による前線兵士への本の送付に応じて多数の出版社が刊行した「野戦郵便図書」の内容、および前線でのドイツ軍兵士への本の販売に関する同時代の報告の内容を考慮

したとき、前線兵士の読書の欲求に娯楽的著作への偏りを見ることは、必ずしも妥当ではない。本発表では、これらに基づいて、次の3点を主張したい。1) 先行研究の主張とは異なり、ドイツ軍兵士の読書は娯楽的著作に偏っておらず、多様であり、名作や世界観的な著作にも高い需要が見られた。2) 先行研究では特に啓蒙宣伝省が娯楽的著作の供給に積極的であったとされるが、必ずしもそうとは言えない。3) 娯楽的著作の普及を根拠として、ナチズムのイデオロギー的破綻や、娯楽的著作の体制維持機能を指摘することには、なお留保が必要である。

### 3. 侮蔑と辱め — カネッティ『群集と権力』における「インフレーションと群集」について

古矢 晋一

エリアス・カネッティ (1905-1994) の主著『群集と権力』(1960) は、著者自身の言葉に従えば、「ファシズムの根源の探求」が目的とされるが、同時代の現象であるナチズムを扱った分析は「群集と歴史」の章に限られている。本発表では、ユダヤ人迫害の背景をなすドイツ国民の「群集」としての独特な情動(侮蔑、屈辱)が考察されている「インフレーションと群集」を主に取り上げ、カネッティの議論の先駆性と特徴を、ナチズムをめぐる思想史的研究の中で再検討する。

『群集と権力』における議論によれば、第一次世界大戦後のヴァイマル共和国時代初期におけるハイパーインフレの際に、ドイツ国民は自尊心の極度の「低下」を体験し、その屈辱の感情をユダヤ人に集団レベルで転嫁したという。カネッティは、通貨価値の急激な下落がドイツ国民の集団(群集)としての価値下落の感情につながったと指摘している。インフレによる経済的混乱に際して、しばしば伝統的に「金銭」のイメージと結びつけられてきたユダヤ人は、ヒトラーとナチのプロパガンダを介して「侮蔑」と「辱め」の対象となり、後のホロコーストの背景の一因を形成したというのがカネッティの議論である。本発表は Kuhnau (1996, 1999) や Widdig (1995, 2001) の先行研究を踏まえつつ、近年のナチズム研究との比較の中でカネッティの議論の意義と妥当性を改めて検証する。そのうえで、スローターダイクの『群集の侮蔑』(2000)などを参照しながら、群集にとっての「侮蔑」や「屈辱」といった情動の機能に注目し、『群集と権力』を、ファシズムをめぐる集団(群集)心理学的観点から再考する。

### 4. ライプニッツの王子教育の提言における演劇教育の導入について

山崎 明日香

本発表はライプニッツの君主教育論『王子の教育についての書簡』(*Lettre sur l'Éducation d'un Prince*, 1685-86)を対象に、そこで提唱された王子に対する演劇教育の導入を検証する。その際に、演技に普遍的な人格形成と諸国統治のための教育価値が付されたことを、周辺諸国の知識人の教育的提言と比較するのみ

ならず、演劇史的また教育学的観点からその重要性を検証する。ライプニッツの啓蒙主義的な教育理念と、世界の事象を視覚的に体系化する「自然と人工の劇場」の理念において、演劇教育は、公子を啓蒙文化的に洗練し、権力的主体としての視覚的な支配の影響力の養成を目的とした。これは、近代ドイツにおける啓蒙的な演劇教育の先駆的な提言であり、周辺諸国と人民支配のための演劇的技巧を身につけた新しい指導者像を提示するものである。

同時代の演劇教育の提言は、文化政策として演劇を推進した仏の知識層にその社会文化的な教育効果の評価がみられる。普遍的理念の視覚化を志向する仏宮廷の演劇文化の影響の下で、ライプニッツは世界の演劇上演を通じた文化政策的な異文化体験を重視した。また子弟の教養と道徳形成を担った学校演劇の影響だけではなく、バロック期の世俗的／宮廷的な教育思想から啓蒙主義的な教育理念を発展させたライプニッツの近代合理主義の教育観が、彼独自の帝王学的提言に反映している。近代の啓蒙主義的な教育観では、人民教化のための「教育者」としての君主像の確立が要請された。このことは、劇場が道徳教育機関へ変貌するに連れた君主の演劇教育を通じた啓蒙化であり、後の民衆教化の提言に先行するものとして注目に値する。

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～12:35）  
F会場（C35教室）

司会：太田 達也・梶浦 直子

**1. Was sollen die Studierenden im Grundstudium lernen? – Überzeugungen (Beliefs) von Deutschlehrenden an japanischen Universitäten**

Elvira Bachmaier

In der Forschung sowie der persönlichen Erfahrung zeigt sich, dass Lehrende, obwohl sie häufig die gleiche Zielgruppe unterrichten, mitunter sehr unterschiedliche Überzeugungen („Beliefs“) hegen, was die verschiedenen Bereiche des Lehrens und Lernens angeht (für die japanische DaF-Lernumgebung s. jüngst z.B. Morita 2017, Ohta & Schart 2018 oder Bachmaier 2017). Besonders das Spektrum der Überzeugungen beim Thema Lernzielorientierung verdient besondere Aufmerksamkeit.

Dabei stellen sich die Fragen:

- Die Vermittlung welcher Kompetenzbereiche halten Deutschlehrende in Japan persönlich für besonders wichtig bzw. eher unwichtig?
- Gibt es Zusammenhänge mit anderen Parametern wie z. B. der Berufserfahrung oder dem Fachgebiet der Lehrenden? Und wenn ja, welche?

Um dies zu untersuchen, wurde von Juli bis August 2018 eine Online-Umfrage unter DaF-Lehrenden an japanischen Universitäten durchgeführt. Die Untersuchung erfasste anhand 5-stufiger Likert-Skalen, für wie wichtig die Lehrenden persönlich die Vermittlung verschiedener Kompetenzbereiche im Deutschunterricht halten. Ihre Bewertung begründeten die Untersuchungsteilnehmenden dann in einem Kommentarfeld.

Der Vortrag gibt Einblicke in die Ergebnisse der Umfrageanalyse und zeichnet ein erstes Meinungsbild der befragten Deutschlehrenden darüber, welche Kompetenzen die sich Studierenden in den ersten beiden Lernjahren Deutsch im Haupt- und Nebenfach aneignen sollten.

**2. 日本人ドイツ語学習者作文コーパスを使用した表現選好傾向抽出の試み**

磯部 美穂・円谷 友英

本発表では、日本人ドイツ語学習者の作文コーパスの分析から、表現選好の一傾向を明らかにし、ドイツ語作文の指導に有用な添削支援システムの構築および応用研究の可能性を提示する。

日本人ドイツ語学習者が自らの言語知識を活用し、作成したドイツ語作文には、学習者の表現上の個性が反映される。しかしながら作文指導の際には、指導者である添削者が、作成された作文を自身の指標に従って添削をおこなわなければならない。添削者は、しばしば学習者の選択した表現の「適切さ」の判断に迷うことがある。本研究では、こうした添削の際に生じる判断の問題を解決するため、作文コーパスを使用した形態素解析を通して、添削作業を支援できるシステムの構築を目標としている。まずは日本人ドイツ語学習者の表現上の個性を抽出することで、学習者の表現の選好傾向を明らかにする。ここでは、

特定の学習者グループにおいて作成されたテキストを用いて、ドイツ語の文体的慣習と学習者の表現との乖離性に着目して分析する。また、指導者によって作成された模範テキストの解析もおこない、学習者の表現の選好傾向と指導者の考える「適切な表現」と照合することで、学習者の個性を尊重できるような添削指標について考察していく。

今回の発表では、小規模なコーパスに基づく特定の学習者グループの表現選好の傾向を明らかにするものである。抽出された傾向の体系化が可能か否かについては、今後の課題ではあるが、現時点での分析結果と今後の展望について報告をおこなう。

### 3. Meditation – Einsatzmöglichkeiten und Erfahrungen im Fremdsprachenunterricht

Luisa Zeilhofer

Die Einbeziehung von Achtsamkeitstraining („Mindfulness“) in den Bildungsbereich rückt immer mehr in den Fokus der Wissenschaft. Ein besonders großes Potenzial, den Unterricht zu bereichern, zeigen dabei Meditationsübungen, welche vermehrt mit der Verbesserung des akademischen, sozialen und emotionalen Lernens in Verbindung gebracht wird. Ramsbourg & Youmans (2013) untersuchten beispielsweise die Auswirkungen von Meditation auf das Wissenserhaltungsvermögen von Universitätsstudenten. Die Ergebnisse zeigten, dass Meditation die Retention der Vorlesung verbesserte. Shapiro et al. (2008) stellten fest, dass die Anwendung von Meditation in der höheren Bildung weitreichend ist und kognitive, affektive und zwischenmenschliche Bereiche beeinflusst. Da es bisher keine Forschung über Meditation in Kombination mit Fremdsprachenunterricht gibt, ist mein Forschungsprojekt in mehreren Punkten neu und zeigt, ob Meditation das Potenzial hat, den Fremdsprachenunterricht auf Universitätsebene zu verbessern. Meditationspraktiken wurden dazu über 3 Jahre in verschiedenen Fremdsprachenklassen mit unterschiedlichen Methoden und Häufigkeiten implementiert. Obwohl die Achtsamkeitsforschung derzeit an Fahrt gewinnt, wissen wir immer noch zu wenig darüber, welche Programme funktionieren und was für wen und unter welchen Bedingungen positive Effekte erzielt werden können. Die Ergebnisse dieses Forschungsprojektes sollen einige dieser Fragestellungen beantworten – und dies speziell im Kontext des Fremdsprachenunterrichts.

### 4. 留学期間における学習者のドイツ語習得を定動詞の位置から考える：縦断的調査の結果より

星井 牧子

ドイツ語の語順習得に関しては、Pienemann (1988) の処理可能性理論 (Processability Theory, PT) により、「枠構造 (SEP)」 < 「主語と定動詞の倒置 (INV)」 < 「副文における定型後置 (V-END)」 という習得順序が提唱され、学習者の習得段階を測るための Profilanalyse (Grießhaber 2010) でも、同様の枠組みが用いられている。定動詞の位置に関する適切な使用からは、主語以外の要素

が前域を占める構造 (XVS) のほうが、学習者にとっては定型後置よりも難しく、適切な使用のためには何が動詞前域となり得るかを理解する必要があることを示唆する調査結果もあり (Hoshii 2010, 2014, 星井 2016)、PT でいう「処理可能」と「適切な使用」との間には一定の距離があると考えられる。

本報告では、日本語を母語とするドイツ語学習者 (大学生) 7 名を対象とした縦断的調査から、1 年間の留学前後の学習者の発話の変化を取り上げる。計 7 回のインタビュー発話および作文データの分析結果から、以下の傾向が確認された。1) 留学期間を通じて、副詞をはじめとする主語以外の要素が前域を占める割合が増える傾向がある。2) V-END 段階に到達していても、\*XVS (XSV および *doppelte Vorfeldbesetzung*) が残る、あるいはまたは留学中に増える場合がある。3) 前域の長さ と XVS 構造の適切さは必ずしも関係しない。前域が 1 語の場合でも、XVS 構造には不安定さが残る。

この報告では、学習者の発話における「適切な使用」における話しことば規範の扱いなど、学習者言語の分析方法や今後の可能性についても議論したい。